平成二十九年度　第百十九回

京都大学書道部

卒業書展

日時

六月十七日・十八日

十時～十七時

（十八日は受付十六時まで）

場所

建仁寺　西来院

禅居庵

―巻頭に寄せて―

以前知人に、自分の中で大事な言葉なのですが「初心忘るべからず」と書いてくれないか、と頼まれた事があります。この言葉、一度は耳にしたことがあると思いますが、どのような意味かご存知でしょうか。書くのにあたって辞書を引くと、『㊟初心忘るべからず《世阿弥の「花鏡」にある言葉》習い始めのころの謙虚で真剣な気持ちを忘れてはならない。』とあります。なるほど知っている通り、と思いつつも前半の括弧の中が気になり調べてみると、実は初めは少し異なる意味だったと知りました。

世阿弥は室町時代の能役者・能作者で、『風姿花伝』『花鏡』などの能楽論書を残しています。『花鏡』は四十代から老後に至るまでの能についての芸術論を説いたもので、その最後「奥の段」に次の一節があります。

しかれば当流に、万能一徳の一句あり。
初心不可忘。
この句、三箇条の口伝あり。
是非の初心不可忘。
時々の初心不可忘。
老後の初心不可忘。
この三よくよく口伝可為。

そもそも世阿弥は「初心」を「未熟な芸の状態」といった意味で使っている。青少年期の未熟な芸をその善悪を超えて忘れてはならない。未熟さを覚えておくことで同じ失敗を防ぎまた上達ぶりの尺度にもなる。そして修行をしていく各段階にもそれぞれの初心があるはずで、それも忘れてはならない。また年老いてある程度の域に達しても能に終わりはないので、その年齢にふさわしい芸を極めることも初心である。生涯通して初心を頭に置くことで芸は向上する、としています。

書道にもこの教えは通じるところがあるのではないでしょうか。書道自体にしても各法帖や書体にしても、始めたばかりのころの下手な字は恥ずかしくて思い出したくない気もします。続けていると初めからできていたように勘違いしそうにもなります。しかし、その時々の失敗やどう乗り越えてきたのか、そして今も未熟なのだと自覚してこそ前に進めるはずです。まだまだ未熟者の中の未熟者ですが、この先も長く書道を続けこの言葉を心において少しずつでも精進していきたいものです。

さて、最後となりますがこの度無事に書展を開催できるのは今年度より顧問を快く引き受けてくださった宇佐美文理教授と行友三輪子様、技術顧問の寺本蒼玄先生をはじめとする多くの方々のおかげです。この場を借りて心より御礼申し上げます。

そしてこの第百十九回京都大学書道部初夏書展にお越し下さった皆様、本日は誠にありがとうございます。正統派の臨書作品から遊び心のあるものまで様々な作品がございます。どうぞごゆっくりとご覧ください。少しでもお楽しみいただければ幸いです。

平成二十九年六月吉日
京都大学書道部　部長　小林由佳

書は人なり

宇佐美 文理（京都大学大学院文学研究科教授）

「書は人なり」という言葉があると思います。

これは、とりわけ書をたしなむ人が好む言葉ではないか、とも思います。

しかし、この言葉には以前から疑問を持っています。これは本当なのでしょうか。そもそもこれはどういう意味なのでしょうか。

この言葉は、「書にはそれを書いた人の人となりがあらわれる」と言い換えることは可能でしょうか。もし可能だとすると、「気性の激しい人の書は激しい字になり、気性のおとなしい人の書はおとなしい字になる」ということでしょうか。それが必ずしもそうではないことは、書を書くみなさんが一番よくご存知でしょう。その人が書いた字を見たことがない仲良し十人を集めて、その人たちの中の一人の字が書かれた紙が誰のものなのか当てるのは、不可能です。

「いや、それは違う。あなたは〈字〉とされているが、ペン書きとかではわからないけれども、〈書作品〉ならばやはり人柄が出るものだ」とおっしゃるかもしれません。

それはそうなのかもしれません。あるいは「その書作品に表れているその人の人柄を読み取れるかどうかが問題なのだ」とされるかもしれません。さらには「上手とか下手とかいうとらわれを捨てて、自然と自分自身が表れるような書を書かねばならない」という考え方もあるかもしれません。

わたくしは、「書は人なり」ということばが、「書を見るとその人がしのばれる」という意味であるなら、それは自分自身の経験からして、その通りであると思います。それは、その人の声と同じように、まさしくその人の行為が記録されたものとして、その人を想うよすがとなるように思います。

おそらく考え方は人それぞれかと思います。それぞれの「書は人なり」を、作品制作を通して、また鑑賞を通して考えてみるのも一興かもしれません。

部屋に飾る作品（一）

寺本 蒼玄（京都大学書道部 技術顧問）

部屋に飾り易い作品で、代表的なものとして、色紙がありますが、色紙の場合、気をつけないこととして、額に入れるか、色紙掛や軸に紐で止めて観賞するかによって書き方が変わります。

額に入れる場合は色紙の周りに貼ってある金色の縁は隠れてしまいます。色紙の縁から五ミリ程は隠れるので、やゝ内側寄りに文字を入れるようにしましょう。普通にバランスよく配字しますと、額に入れた時、見た感じが外側に一杯に見えます。色紙掛や軸に飾った場合は、そのままの配字で良いと思います。

次に文字の収め方ですが、一字の場合、縦に長い文字、又は横に広がる文字が良いのですが、左右対称形の文字や、画数の少ない文字は難しいので避けるようにしましょう。

二字句の場合、縦に収める時は、上の字は小さめで、下の字は横に広がると収まり易いです。又は、二字共広がる文字も可です。縦に長い文字二字の場合は、色紙を横に使うと良いのですが、やはりどちらかが画数が少ないほうが良いでしょう。

三字句、四字句の場合、三字目の文字が大切です。画数の多い字が良いですね。文字の形により、縦型式か横型式に収めて下さい。

好きな言葉や語句で選文するのも良いですが、初めの内は、文字の配字が良い語句を選文するようにしましょう。

次回は五字句以上について説明します。

臨書と創作

○臨書

過去の優れた筆跡を手本として書くことです。

臨書は段階や態度によって三種類に分けられます。最初のステップは、古典の字形や用筆に迫ろうとする、「形臨」と呼ばれるものです。形をまねることは、その古典に迫る最も近い方法です。

形がある程度まねられるようになってくると、次は古典に漂う雰囲気や運筆のリズムなど、形以外の要素に重点をおいてとらえようとする「意臨」の段階に進むことができます。このような、形以外の要素をとらえようとする態度は、真筆が歴史の中で失われ、模写したものや拓本しか残っていないような古典を臨書する際に求められることがあります。

古典をよく学んだうえで、書くときはそれを見ないで書く方法を「背臨」、臨書を重ねた後、臨書から学び取った古典の特徴や表現方法などを生かして、その古典とは別の字句を書くことを「倣書」といいます。この態度は創作につながるステップとなります。

書のあらゆる作品は、このような過去の作品から学ぶことを基盤としています。書道における基本と呼べるものが、臨書なのです。

○創作

自らの創意工夫による書の表現をいいます。

自分が伝えたいこと、表現したいことを明確にして、それに合った素材（語句や詩文）や表現方法を選び、試行錯誤しながら、自分の主張や個性が表れた作品になることを目指します。

臨書によって古典から得られる様々な表現方法を用いることで、作品に味わいや深みを出すことが出来るようになります。

○法帖

芸術作品として残された個人の書を、石や木に刻して拓本をとり、臨書や鑑賞に便利なように帖仕立てにしたものです。

今回の初夏書展では、各臨書作品の右横に臨書した箇所の法帖を掲示して、皆様にご覧いただけるようにしています。

作品鑑賞の参考に、こちらも是非ご覧ください。

書体について



『篆書』
漢字のもっとも古い形で、現在使われている漢字のもとになった字体です。秦朝に小篆として統一されたものが一般的です。均一な太さの線が特徴です。



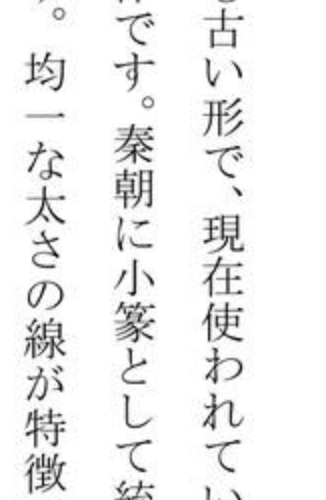
『隷書』
役人が複雑な字形だった篆書を早書きした際生まれた字体です。字形は横長で、時代が進むにつれ、線の終わりに独特な「波磔」がみられるようになります。



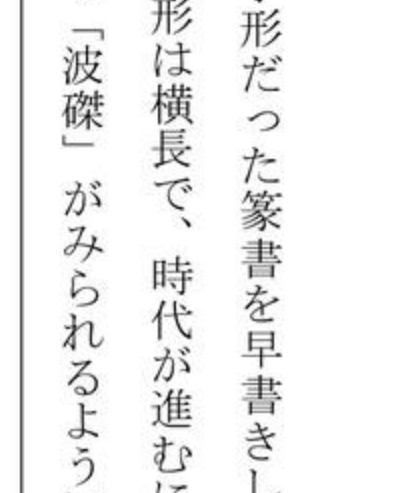
『楷書』
隷書からさらに記号化された、バランスの取れた字体です。その整った字形から、現在の漢字の基本とされています。



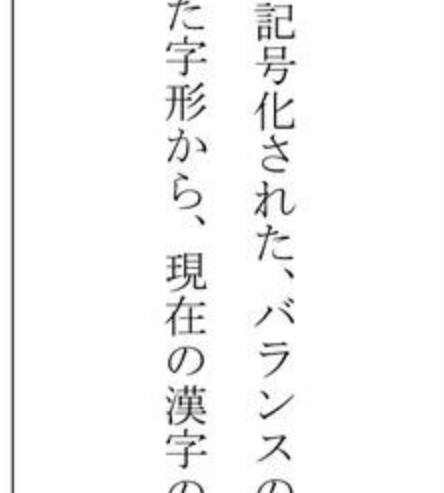
『行書』
隷書から発展した字体で、点画や線にしなやかさと変化がみられます。筆の速度や点画の流れが最も重視される書体といえます。



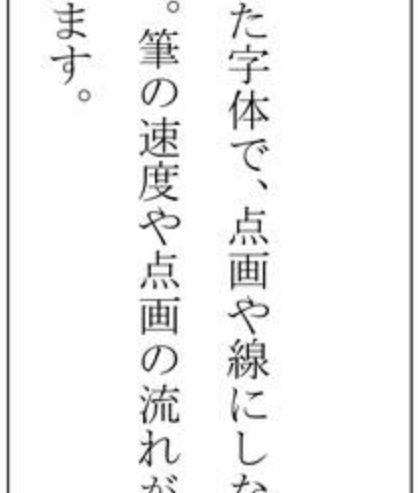
『草書』
隷書を早書きすることから発展しました。線の省略や筆順に変化があり、自由度の高い作品となります。文字から文字へと流れる「連綿」の美しさも魅力です。



『かな』
日本独特の表音文字です。草書の簡略化によって生まれました。漢字にはない流麗な筆致と同じ音を表す複数のかな、「変体仮名」による創意工夫が魅力です。



『調和体』
日本語の近代詩文や現代詩などを題材に、誰にでも親しみやすい書体で書いたものです。漢字かな交じりという日本語独自の特徴を生かした作品形態です。



『甲骨文』
亀甲・獣骨に刻まれた中国古代の文字です。これは最古の漢字の形であり、古代に行われた占卜の記録を刻したものです。

書家説明集

文責：原誠人

○書史概観

書の発展は**王羲之(おう・ぎし)・顔真卿(がん・しんけい)**と共にある。中国の書人は時に真卿に振れて意を主張し(**黄庭堅(こう・ていけん)**など)、時に羲之に返って品格を求め(**文徴明(ぶん・ちょうめい)**など)てきた。明末清初に「見せる」書が飛躍したとき**王鐸(おう・たく)**が範としたのは羲之であり、清後期に碑文(500 頃成立した一連の**造像記**など石刻の楷書)研究が興ったとき何紹基(か・しょうき)や趙之謙(ちょう・しけん)が並行で学んだのは真卿であった。日本では**空海**らの活躍で羲之を基盤とする書が確立した。**かな**の成立以後は漢字書も完全に**和様**化して日中書史は別の歴史を歩んだが、明治に日下部鳴鶴(くさかべ・めいかく)、中林梧竹(なかばやし・ごちく)らにより書壇の交流が進むや、羲之・真卿の影響は日本でも再び顕在化して今に至る。

○王羲之(307？ ～ 365？(晋)) ～究極の規範、永遠の書聖～

楷・行・草の各書体を整理完成させた。書史上最高傑作の一つとされる行書**『蘭亭序』**(臨：覚道、森)はもとより、**『東方朔画賛』**(臨：挟間)等の楷書、『十七帖』等の草書も韻致に富み格調高く、「書聖」と仰がれる。羲之の書を継ぎはぎした**『集字聖教序』**(臨：松尾、村上、吉岡)は行書修練に最適の題材とされるが、編者懐仁(えにん)はこれをまとめあげるのに二十余年を費やしたという。(参考：神崎**『(臨)楽毅論』(光明皇后**宸筆))

○顔真卿(709 ～ 785(中唐)) ～古法の破壊、或いは止揚～

安史の乱に際し玄宗を助け名声を得、李希烈の反乱に際し懐柔を拒絶して最期を迎えたという忠義の人。筆跡ごとに趣が異なり「一碑一面貌」と言われる。『蘭亭序』と双璧の行書**『争座位文稿』**(臨：竹内)は激情のまま右に傾き左に流れ、楷書**『多宝塔碑』**(臨：上村)は均整と生々しさを兼ねる。『裴将軍詩』に至っては五書体が混在する(破体)。羲之の伝統を破る書風に歴代書家の間でも好悪は分かれるが、評価は争い得ない。

○文徴明(1470 ～ 1559(明)) ～文人は羲之・庭堅の夢を見る～

9 度科挙に挑んだがすべて落第、54 歳で官職を得るも 3 年で辞職した。詩書画に通じた明代を代表する文人で、毎日「千字文」を 10 本写したという。黄庭堅に酷似した**『行書詩巻』**(臨：佐武、金岡)、**『自書七言律詩幅』**(臨：木下)等が有名であるが、それ以上に羲之(特に『集字聖教序』、『楽毅論』等)に傾倒し真に迫った。

○王鐸(1592 ～ 1652(明末～清初)) ～その屈託を書に込めて……～

明(漢民族)の宰相でありながら清(女真族)に投降し仕えたため漢民族に嫌われ、作品も多数流出した。羲之の臨書に専心してリズムを吸収、辿り着いた心手一如の連綿(続け書き)は章法(配字や流れ)に革命をもたらし、現代日本の展覧会書道への影響も絶大である。逆輸入により中国でも再評価を得る。(臨：矢野、角、平野)

○空海(774 ～ 835(平安初)) ～弘法さまは日本の書聖～

「弘法筆を選ばず」の弘法大師。中国に渡って仏教を学び、高野山で真言宗を広めた。**橘逸勢(たちばなの・はやなり)、嵯峨天皇**とともに「三筆」の一人。代表作には**『風信帖』**(臨：渡辺)『灌頂記』のように字形・品位とも羲之の神髄を得た第一の系統と、『崔史玉座右銘』等、奇形の文字(「雑体書」)が並ぶ第二の系統とがある。三筆に共通するこの二面性は、それぞれ日本書史上重要な意義をもつ。(参考：原**『伊都内親王願文』**(伝 橘逸勢書)、一二**『哭澄上人詩』**(嵯峨天皇宸筆))　●その他の臨書作品：藤井**『(集空海)般若心経』**

参考文献：鈴木翠軒『新説和漢書道史』、石川九楊『書家 101』、『中国書道史の 10 人』(季刊墨スペシャル 28)

作品一覧

技術顧問

寺本蒼玄　創作・『雲遊出世塵』『蓋世氣』……10

二回生

覚道直治　臨書・王羲之『蘭亭叙』……17
勝野初紀　創作・『森羅万象』……17
金岡杏祐　臨書・文徴明『行書詩巻』……27
金山優作　臨書・何紹基『臨漢李剛石室殘字』……27
佐山侑莉　臨書・呉昌碩『行書幅』……28
中村勇真　臨書・趙孟頫『玄妙観重修三門記』……20
野田智子　臨書・傅山『遊仙詩巻』……32
挾間優美　臨書・董其昌『頒風図詩巻』……21
一二暉生　臨書・王羲之『東方朔画賛』……21
平井達也　臨書・嵯峨天皇『哭澄上人詩』……33
村上友梨　臨書・作者不詳『曹全碑』……21
森ちひろ　臨書・王羲之『集字聖教序』……34
吉岡智志　臨書・作者不詳『中山王セキ方壺』……34

三回生

阿部朱夏　臨書・作者不詳『高樹解佰都等造像記』……11
今村朱里　臨書・呉熙載『楷書東方朔画賛』……11
上村香鈴　臨書・顔真卿『多宝塔碑』……16
浦川真由子　臨書・傅山『七言絶句幅』……12
小野日菜乃　臨書・作者不詳『孫秋生劉起祖等造像記』……13
神﨑七海　臨書・光明皇后『楽毅論』……13
木上博之　臨書・村上翠亭『百人一首　第五首　猿丸太夫』……18
郡健一郎　臨書・康里子山『述筆法巻』……17
小林由佳　臨書・作者不詳『礼器碑』……13
米田景　創作・『古事記』……27
近藤泰仁　臨書・欧陽詢『九成宮醴泉銘』……27
阪井田有紗　臨書・陳奕禧『七言絶句幅』……28
佐武千寛　臨書・文徴明『行書詩巻』……14
杉本舞　臨書・董其昌『酒徳頌巻』……19
角裕介　臨書・王鐸『草書七律五首』……19
橘大輝　臨書・張瑞圖『杜甫飲中八仙歌巻』……29
徳田寛生　臨書・『源氏物語絵巻　鈴虫』……19
仲村康太郎　創作・『瀼』……30
中村直樹　臨書・作者不詳『元珽妻穆玉容墓誌銘』……30
橋詰都　創作・『夕陽を見ているか』……20
原誠人　臨書・伝紀貫之『高野切第五種』……31
平野晶子　臨書・呉熙載『聖教序』……31
松尾和輝　創作・『戯作三昧』……32
臨書・伝橘逸勢『伊都内親王願文』……32
臨書・王鐸『行書贈単大年家丈』……22
臨書・沈周『化鬚疏』……33
臨書・王羲之『集字聖教序』……14

頁番号

四回生

岡本晴香　創作・『僕クエスト』……12
木下有羽　臨書・文徴明『自書七言律詩』……18
竹内春佳　臨書・顔真卿『争坐位文稿』……30
深谷拓未　創作・『山頭火句』……34
矢野凱己　臨書・王鐸『為宿松書詩』……15
山口和樹　創作・『四季』……35
山崎夏野　創作・『麟鳳遊』……15
渡辺顕　創作・『春逐鳥聲開』……35
　　創作・『芙蓉楼送辛漸』……23
　　創作・『鶴舞千年樹』……35
　　臨書・孫過庭『書譜』……23
　　臨書・空海『風信帖』……36

修士一回生

新井一矢　創作・『周易』……16
上西隆太　創作・『一日一歩』……26
牛山泰喜　臨書・作者不詳『魏霊蔵薛法紹造像記』……26
閻姝恒　創作・『折節』……16
角谷遊野　創作・『和而不同』……26
釜阪紘平　創作・『不撓不屈』……17
島津七明　臨書・作者不詳『曹全碑』……19
白谷暢浩　創作・『ファイト！』……29
宗哲仁　創作・『俯仰媿古今』……20

博士課程修了

藤井基弘　臨書・空海『集釈空海般若心経』……22

合作

金山優作／佐山侑莉　創作・『夏の清陰』……24
中村直樹／原誠人　臨書・蘇軾・黄庭堅『黄州寒食詩巻／黄州寒食詩巻跋』……24
勝野初紀／金山優作　創作・『春の来訪』……36
勝野初紀／野田智子　創作・『水月』……37
矢野凱己／山口和樹　創作・『風』……37
全体合作　『心理テスト』……25
三回生合作　『思い出のあの書を再び』……25
二回生合作　『他己紹介』……25
新入生合作　『新入生合作』……25

作品紹介

賛助作品

技術顧問　寺本蒼玄　先生

○西来院作品



『雲遊出世塵』　朴荀鶴

「雲のように自由に遊び、俗世の塵外に出る。」

豪快に力強く行を流して、ゆったりとした動きを表現してみました。

○禅居庵作品



『蓋世氣』　史記

「雄大で、盛んな意氣。」

遅速の運筆で筆勢を出るように工夫してみました。

○西来院

1

阿部朱夏　三回生
臨書　楷書　作者不詳『高樹解佰都等造像記』　二尺×八尺

「景明三年五月卅日邑主高樹維那解佰都卅二人等造石造一區願元世父母及現世眷屬來身神」

一度は書いてみたいと思っていた二八作品に挑戦しました。造像記特有の、するどい始筆・終筆に苦戦しましたが、作品サイズの大きさによる魅力補正にも助けられながら、未熟なりに書き上げることができたと思います。



2

今村朱里　三回生
臨書　楷書　呉熙載『楷書東方朔画賛』　二尺×八尺

「大夫諱朔字曼倩平原厭次人也魏建安……（略）」

二八作品に初チャレンジしました。ぼってりとした楷書を書きたくて、探した結果この法帖に出会いました。書いていてしっくりきたので、もっと練習を積んで続きもまた作品として出したく思っています。



3

浦川真由子　三回生
臨書　行草書　傅山『七言絶句幅』　二尺×八尺



「龍王社鼓鬧村雩抛却殘書也杖扶愁無角抵酬花眼誰好麈糟俯灶觚」

テンポよく書けそうだと思い、これにしましたが、自分が持っていたリズムとはまた違ったので苦戦しました。傅山の独特なリズムは「抛却残」でよく表れているように点画を移動する際に筆を大きく回すことで生まれます。やっているうちに、これはこれで好きだなぁと感じるようになりました。

4

岡本晴香　四回生
創作　近代詩文書　『僕クエスト』　二尺×八尺



「夢の片隅で描いた世界でいつか僕は大空を駆ける」

「書道は私にとってどういう存在なのか」と、自問しながら制作を進めました。まとまりが良いだけの作品にはしたくないといつも思っていますが、ついつい頭で考えてしまい勢いが乏しくなってしまいます。ダイナミックな作品が書けるように、これからも練習していきたいと思います。

5

小野日菜乃　三回生

臨書　楷書　作者不詳『孫秋生劉起祖等造像記』　二尺×八尺

「大伐太和七年新城縣功曹孫秋生新城縣功曹劉起祖二百人等……（略）」

本作は、龍門二十本にも数えられる名書です。力強さや勢いは大事にしつつも、それらに偏重することなく、文字の美しさを活かせるよう努力しました。



6

小林由佳　三回生

臨書　隷書　作者不詳『礼器碑』　二尺×八尺

「年青龍在霊皇極之君霜月之日魯相河……（略）」

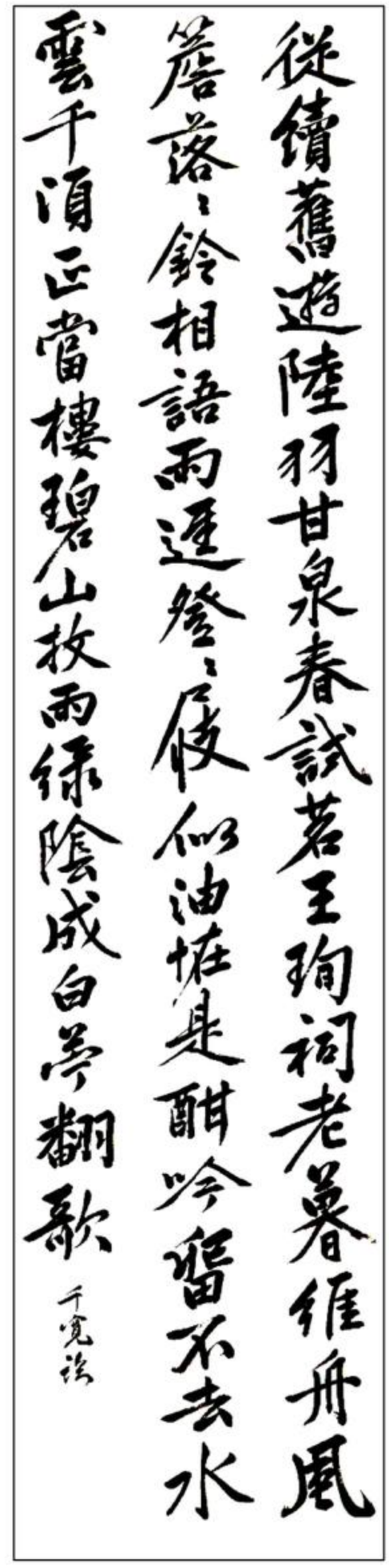
過去の書展で楷・行・草に取り組んできたので次は隷書でしょ、という事で礼器碑に挑戦しました。一文字の中での線と線の間隔、そして全体として行・列を「揃える」事がこの作品を美しく見せるための条件と思いながらも大雑把な性格が災いしてか苦戦を強いられました。もっときっちりした人間になりたいものです。



7

佐武千寛　三回生

臨書　行書　文徴明『行書詩巻』　二尺×八尺



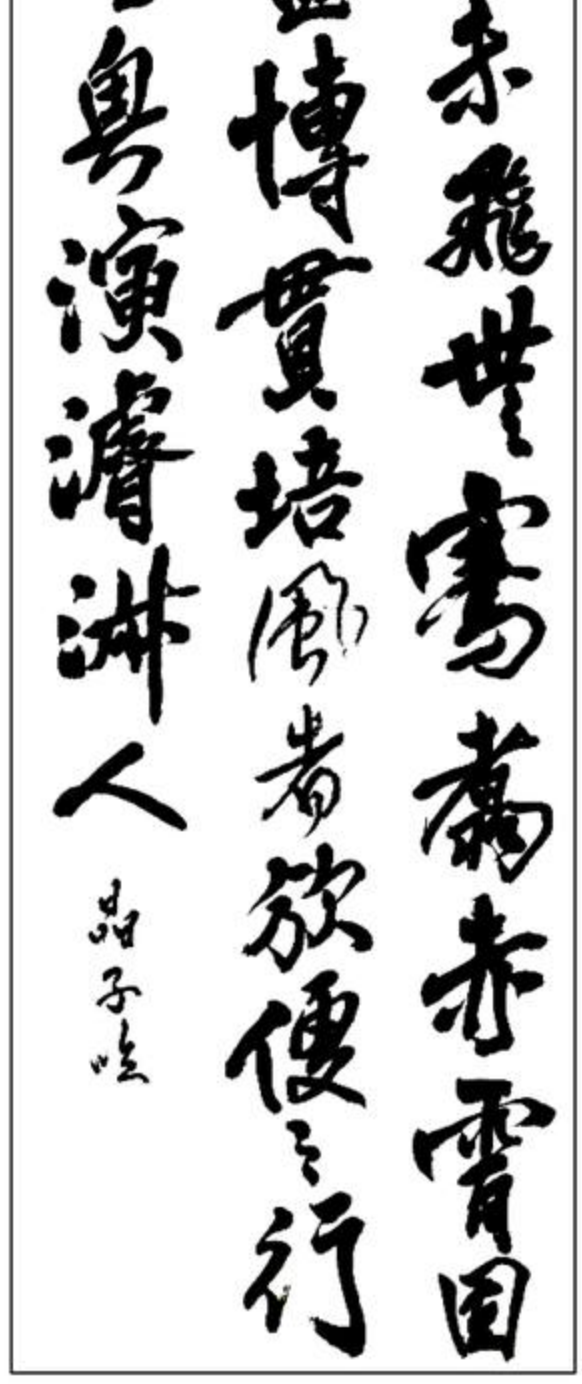
「従續舊遊陸羽甘泉春試茗王珣祠老暮維舟風篽落々鈴相語雨逕登々屐似油恠是酬吟留不去水雲千頃正當樓碧山收雨綠陰成白苧翻歌」

前回に引き続き二回目の文徴明です。最初と最後の二文字を書きたいがために字数が多くなってしまい構成には悩ましたが、結局書きたいものを書くことにしました。晴れやかな気持ちです。

8

平野晶子　三回生

臨書　行草書　王鐸『行書贈単大年家丈』　二尺×八尺



「老兄竺学翮健未飛世之鶱翥赤霄固羽如輪然豈尽博貫培風歟便之行擁鼻比闡顕聖奥演濬淑人」

最近、書道作品集のページをめくりながら家でのんびりコーヒーを飲む時間が至福です。その至高のひとときに出会ったのがこちら。王鐸晩年の線からにじみ出る貫禄に「ときめき」を感じる日々です。

9

矢野凱己　四回生

臨書　行草書　王鐸『為宿松書詩』　二尺×八尺



「憶君昔相聚握手輒相知繼此南北阻彭城又一時野麝亦有匹山槲亦有枝及今晤仲氏桃萼倏霏微聞君事農穡　牧犢必沖夷何口尋岱嶸鼎共一師」

王鐸独特の行の揺れや濃淡のバランスはできる限り忠実に再現するように心がけました。線質などは個性が出てしまっているところが多々ありますが……それも味ということで。

10

山口和樹　四回生

創作　行書　『麟鳳遊』　二尺×八尺



「麟鳳遊」

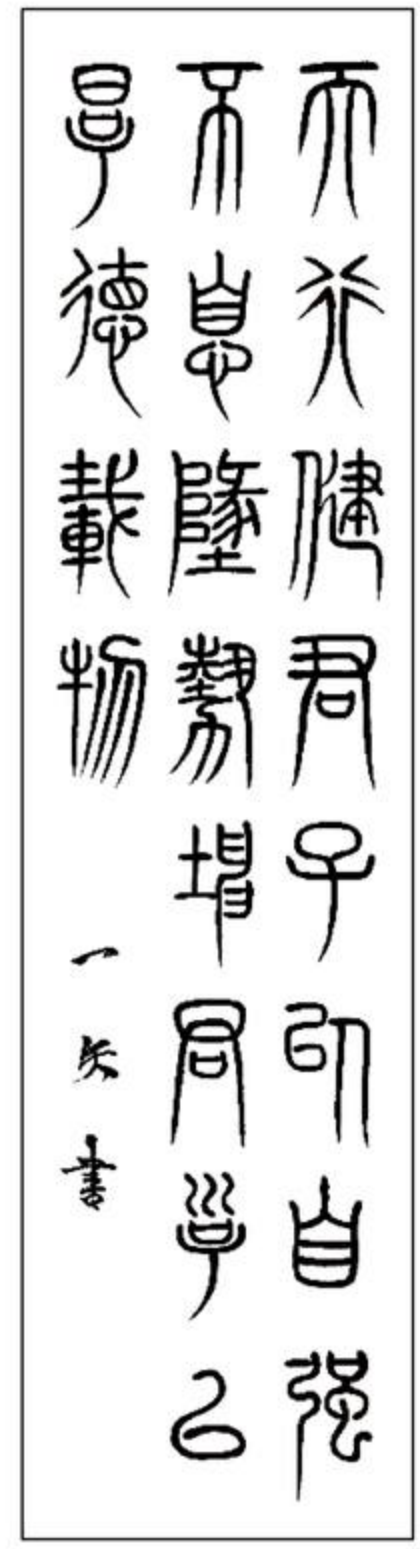
麟を書いたところで筆の軸から穂が抜けた。しかし、諦めずそのまま穂を直接手で掴み、書き上げたところ、今までで一番良い出来だった。

故事成語の解説みたい。

11

新井一矢　修士一回生
創作　篆書　『周易』　半切

「天行健君子以自強不息地勢坤君子以厚德載物」
出典は『周易』という儒教の経書で、意味は「天の運行が順序正しいように、君子は自らの強い意志で世の中を発展させ続けなければならない。大地があらゆる生物を育むように、君子は人徳を厚くし大きな包容力を持たねばならない。」ということです。
終筆が針のように鋭く独特な麗しさがある秦代の懸針篆から集字しました。



12

上村香鈴　三回生
臨書　楷書　顔真卿『多宝塔碑』　半切

「偈曰佛有妙法比象蓮華圓頓深入眞淨」
人は憧れに近付こうと頑張りますが、自分はそこに到達できないことにどこかで気付き、落ち込んでしまいます。書道においてもかっこいいと思った字を自分でも書いてみたいと思い、手を出してみますが、理想とはかけ離れた字しか書けず、嫌になってしまいます。憧れはそっと外から見つめているのが良いということでしょうか。



13

閻姝恒　修士一回生
創作　行書　『折節』　A４横

「正是江南好風景 落花時節又逢君　（正（まさ）に是（これ）　江南（こうなん）の好風景、　落花（らっか）の時節（じせつ）　又（また）君（きみ）に逢（あ）う）」
桜が舞い落ちる時、また君と出逢うというシーンですね。



14

覚道直治　二回生
臨書　行書　王羲之『蘭亭叙』　半切

「趣舎萬殊靜躁不同當其欣於所遇暫得」独特の文字のバランスと流れを意識して臨書しました。ご批評よろしくお願いします。



15

勝野初紀　二回生
創作　甲骨　『森羅万象』　全紙

「朔牛河女彩幻正問月他無望言壁……（略）」

森羅万象は、あらゆる現象、宇宙に存在する一切のものを指した言葉です。この言葉を聞いた時、何を想像しますか？ひとりひとりの感じ方が違うように、世界の見え方もひとりひとり違うのではないでしょうか。そんな事を考えながらこの作品を作りました。字の配置や色には意味があります。気づいていただけたら幸いです。



16

釜阪紘平　修士一回生
創作　『不撓不屈』　半切

「不撓不屈」

今年から宇治で新しい研究を始めました。初めてでなかなか大変です。それでも、強い意志を持って取り組んで行こうと思い、この言葉を書きました。いずれこの研究が人々の幸福を導くものになると願いつつ。



17

神﨑七海　三回生
臨書　楷書　光明皇后『楽毅論』　半切

「則擧齊之事所以……（略）」

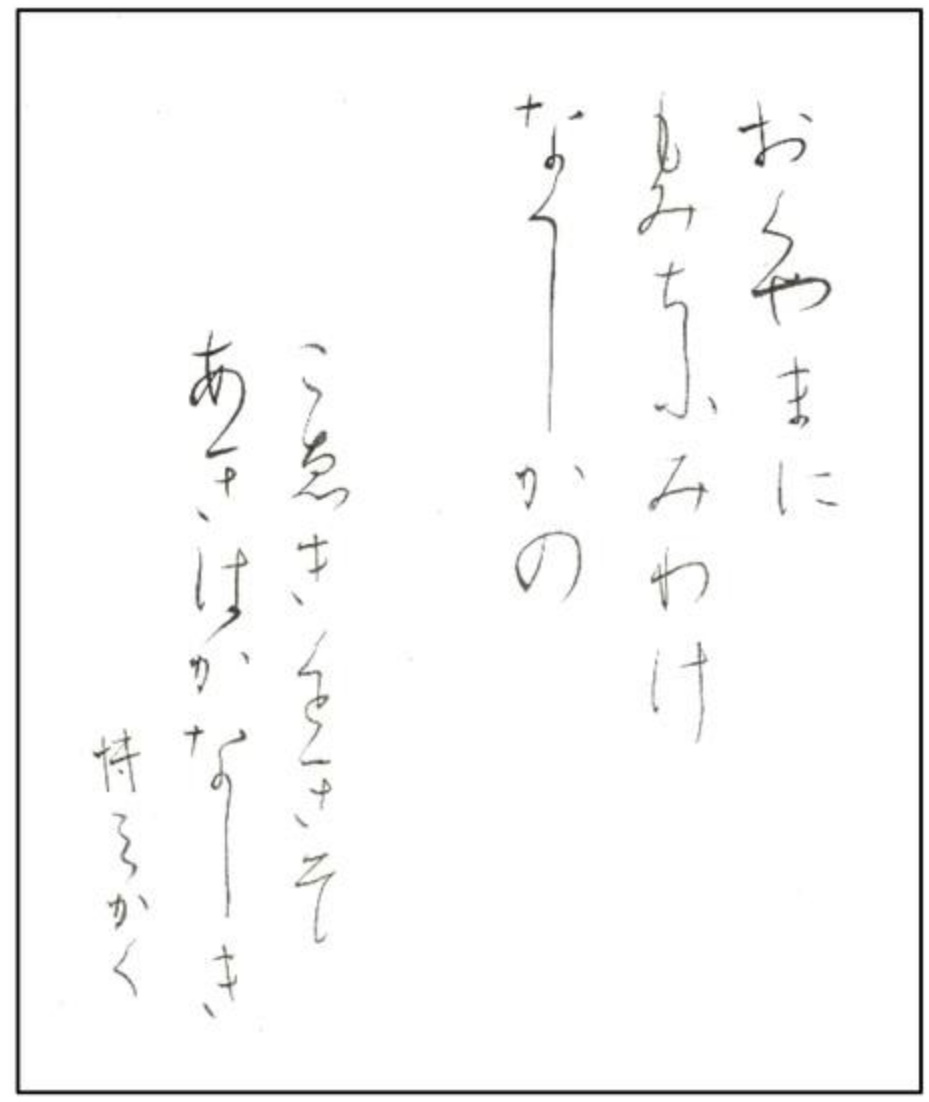
いちばん好きな古典作品です。力強く芯のある線、はっと息を呑むような気迫。懐の深さを表すような線の厚みがまた素敵…。背筋をしゃんと伸ばしなさいと優しく叱ってくれそうな作品を目指しました。



18

木上博之　三回生

臨書　かな　村上翠亭『百人一首　第五首　猿丸太夫』　色紙



「奥山に　紅葉踏み分け　鳴く鹿の　声聞くときぞ　秋は悲しき」

初めて書展に出品しました。偶然が重なり、かなを書いています。鹿の鳴く声は聞いたことないですが、この歌のように風情を感じる短歌を詠んでみたいものです。

19

木下有羽　四回生

臨書　行書　文徴明『自書七言律詩』　半切横



「聖主廻鑾宿肅百靈紫雲団蓋翼青精属車剣履星辰麗先鴛旂」

大阪市美術館の特別展「王羲之から空海へ」において最も惹かれた作品の一つを臨書しました。この作品から感じられる文徴明らしいシャープな線質と左右に伸びる長短入り交じった点画、そして自由な書きぶりが表現できていればと思います。

20

島津七明　修士一回生
臨書　隷書　作者不詳『曹全碑』　15cm×38cm

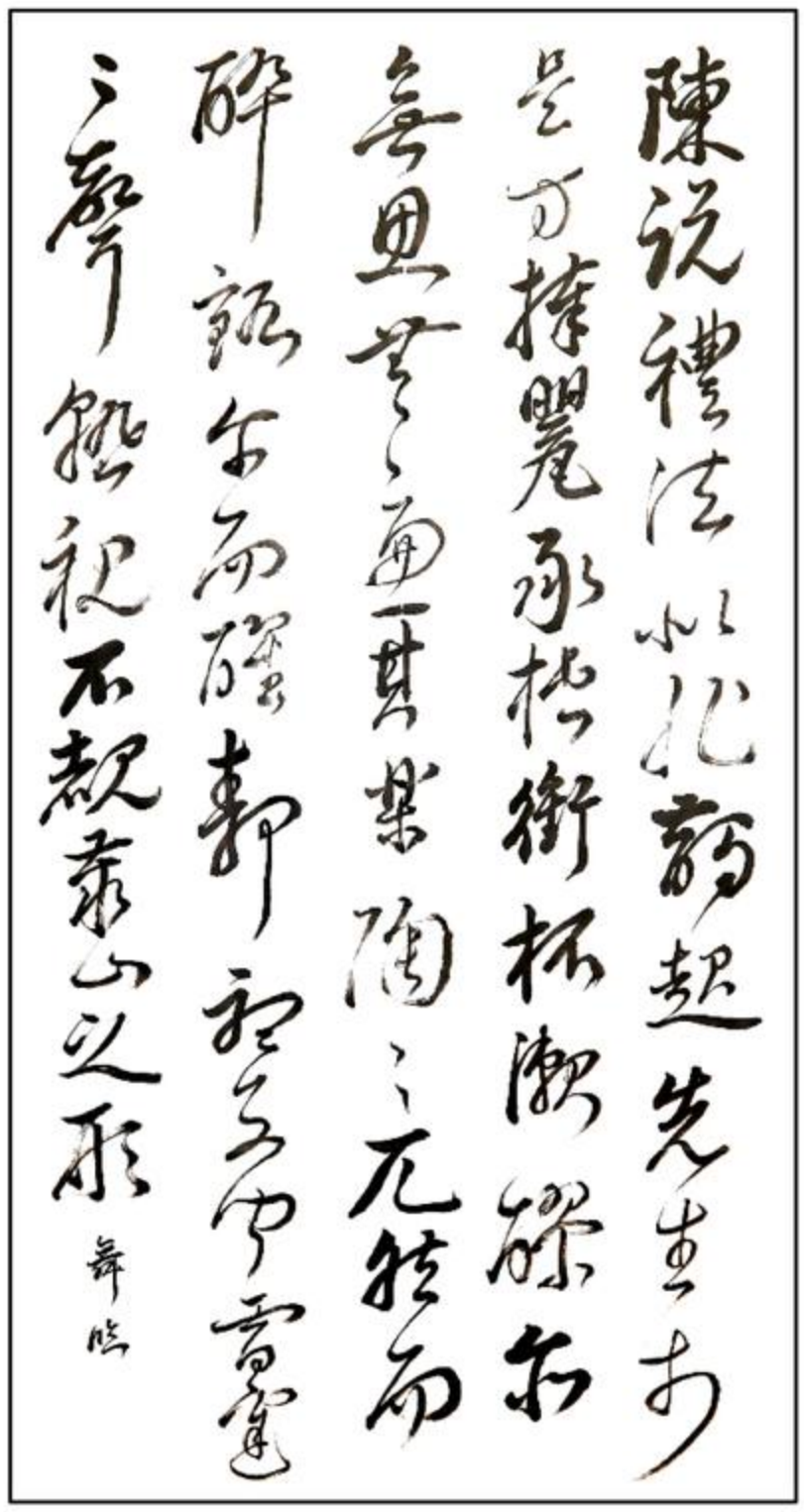
「平元年遭水災害退神之徒不寺門承望……（略）」
切りました。

NO IMAGE

21

杉本舞　三回生
臨書　行書　董其昌『酒徳頌巻』　全紙

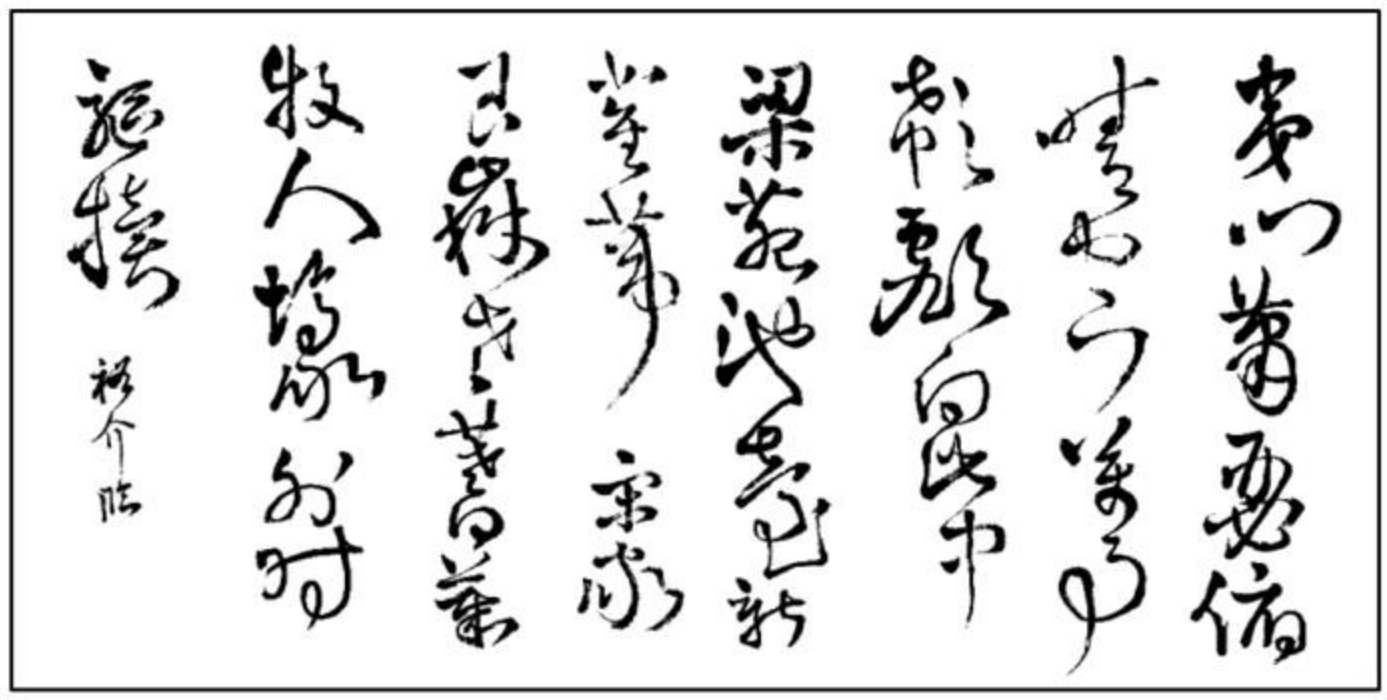
「陳説禮法似非鵲起先生于是方捧甕承桶含杯漱醪亦無思……（略）」
董其昌の、力強さと連綿の美しさを兼ね備えた書が少しでも表現できていれば嬉しく思います。ご批評よろしくお願いします。



22

角裕介　三回生
臨書　草書　王鐸『草書七律五首巻』　全紙横

「夷門蕭瑟俯晴空　萬事欷歔向此中　梁苑池臺新雀羣　宋家艮嶽老著叢　牧人壕外時驅犢」
冬樟展に引き続き、王鐸を選びました。一見、縦横無尽に乱れているかのような形ですが、どこか均衡の取れたような感じが飽きません。ぱっと見て、王鐸だとわかるような作品を目指したく思います。





23

宗哲仁　修士一回生
創作　行草書　『俯仰媿古今』　半切

「俯仰媿古今」
後輩は眩しく輝き、先輩の背中はますます大きく見え、隣では同輩が大きな一歩を踏み出している。愧じ入ることはしたくない、そんな思いです。



24

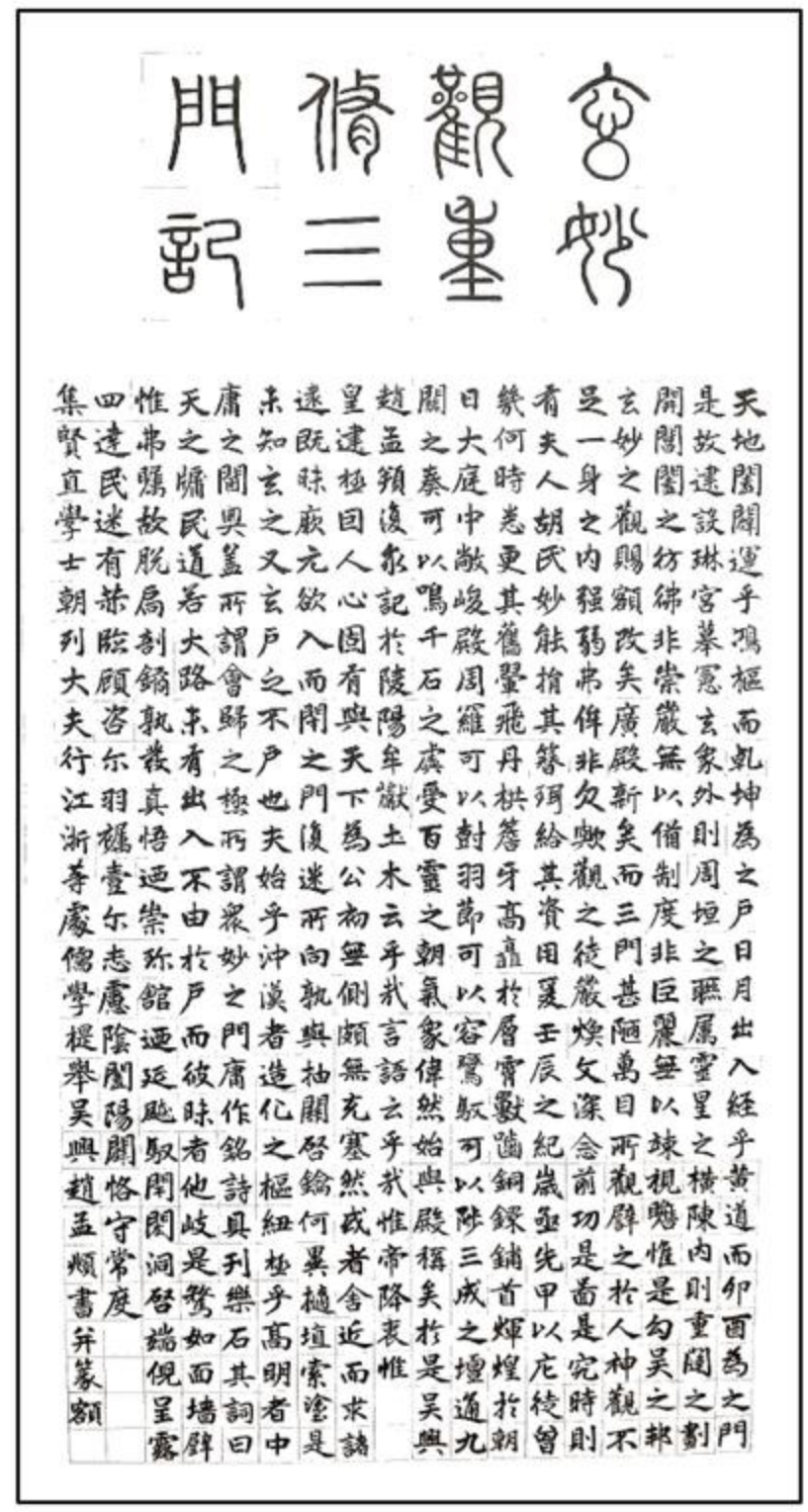
仲村康太郎　三回生
創作　行書　『瀧』　色紙

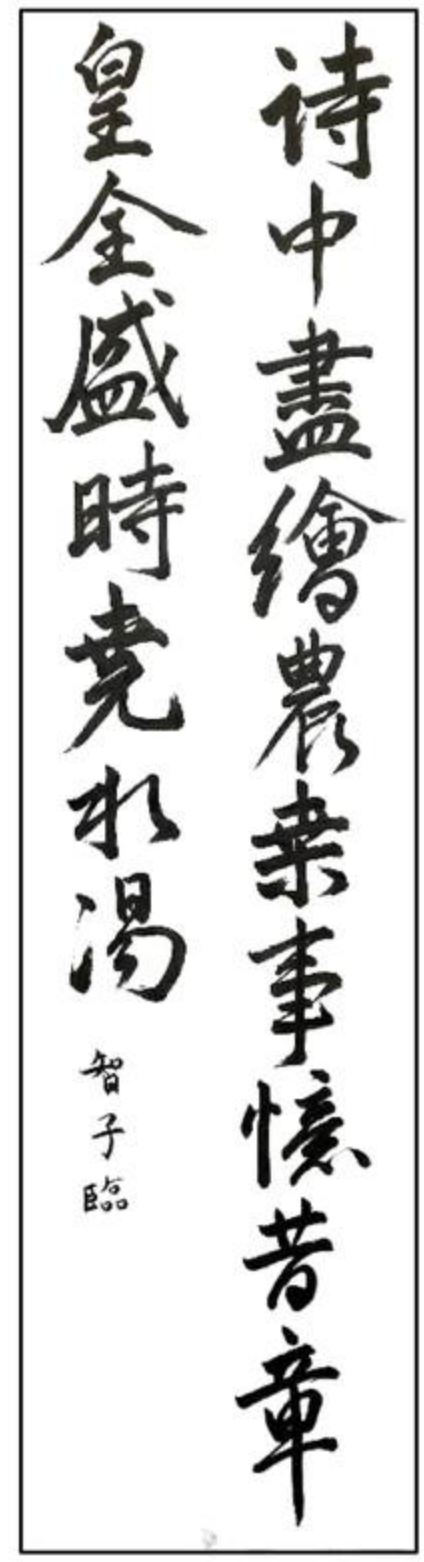
「瀧」
「瀧」は「法」の正字。古代、「鷹（ち）」という、罪人を見分けられる不思議な鹿がいて、その鹿が裁判を左右したという。今の時代からすれば「法」もへったくれもない話である。ところで、日本でいうところの書道は中国では「書法」。「法」は規範の意。古典によらぬ書の無法者になってはいないかと、自問の絶えない。

25

中村勇真　二回生
臨書　楷書　趙孟頫『玄妙観重修三門記』　全紙

「天地闔闢。運乎鴻樞。而軋坤為之戸。日月出入。経乎黄道。而卯酉為之門。是故建設琳宮。摹憲玄象。外則周垣之聯属。靈星之横陳。内則重闥……（略）」
元の書家、趙孟頫の楷書は、柔らかな線とどっしりとした雰囲気が特徴的です。これは私の元々の字の特徴と対照的で、臨書するのにとても苦労しました。また、字数の多さから心が折れかけましたが、圧倒的に感動的で理想的な重厚で穏和な楷書を目指しました。





26

野田智子　二回生

臨書　行書　董其昌『頒風図詩巻』　半切

「詩中尽絵農桑事憶昔章皇全盛時尭水湯」

初めて董其昌の作品を書いてみたのですが、字のバランスをとるのが難しく苦戦しました。一行目の字をおさまるように大きさを整えるのも大変でした。また、字の太さ細さの特徴を出すように心がけました。そして、伸ばすところはなめらかな線を出すことを目標に挑戦しました。

27

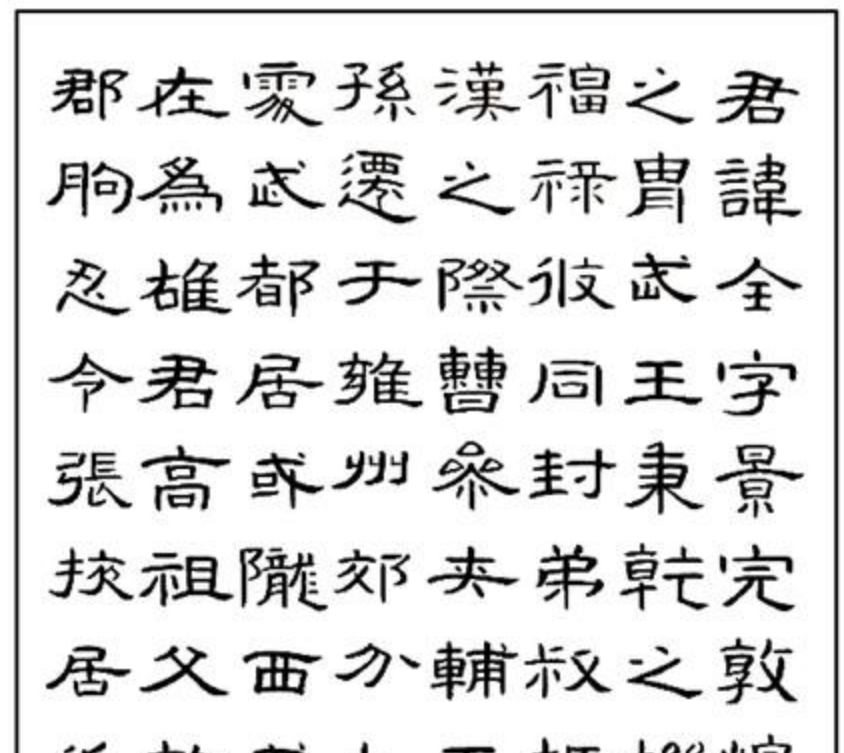
挟間優美　二回生

臨書　楷書　王羲之『東方朔画賛』　半切

「若及博物触類多能合変以明讃以知来典八素九丘陰陽図緯之学百家衆流之論」

穏やかで優しそうな作品の雰囲気に惹かれて臨書しました。全体のバランスを整えること、柔らかい線を出すことに苦戦しましたが、好きなだけ時間をかけて書く楷書が好きだなぁと改めて実感した作品制作でした。





28

平井達也　二回生

臨書　隷書　作者不詳『曹全碑』　全紙

「君諱全字景完敦煌效穀人也……巴郡朐忍令張掖居延」

書道において隷書体の範を示し、後世から高い評価を受けている『曹全碑』。全体的にはしなやかで美しく女性らしい。しかし、一本一本の線は芯が通っている。私のまだ見ぬ作者は、きっと凛然たる人物であっただろうと想像しています。

29

平野晶子　三回生

臨書　行書　沈周『化鬚疏』　巻子

「化鬚疏有序茲因趙鳴玉……（略）」

沈周が鬚にまつわる愁いを徒然なるままに綴った文章です。その繊細さと説得力を兼ね備えた線質を再現できているでしょうか。



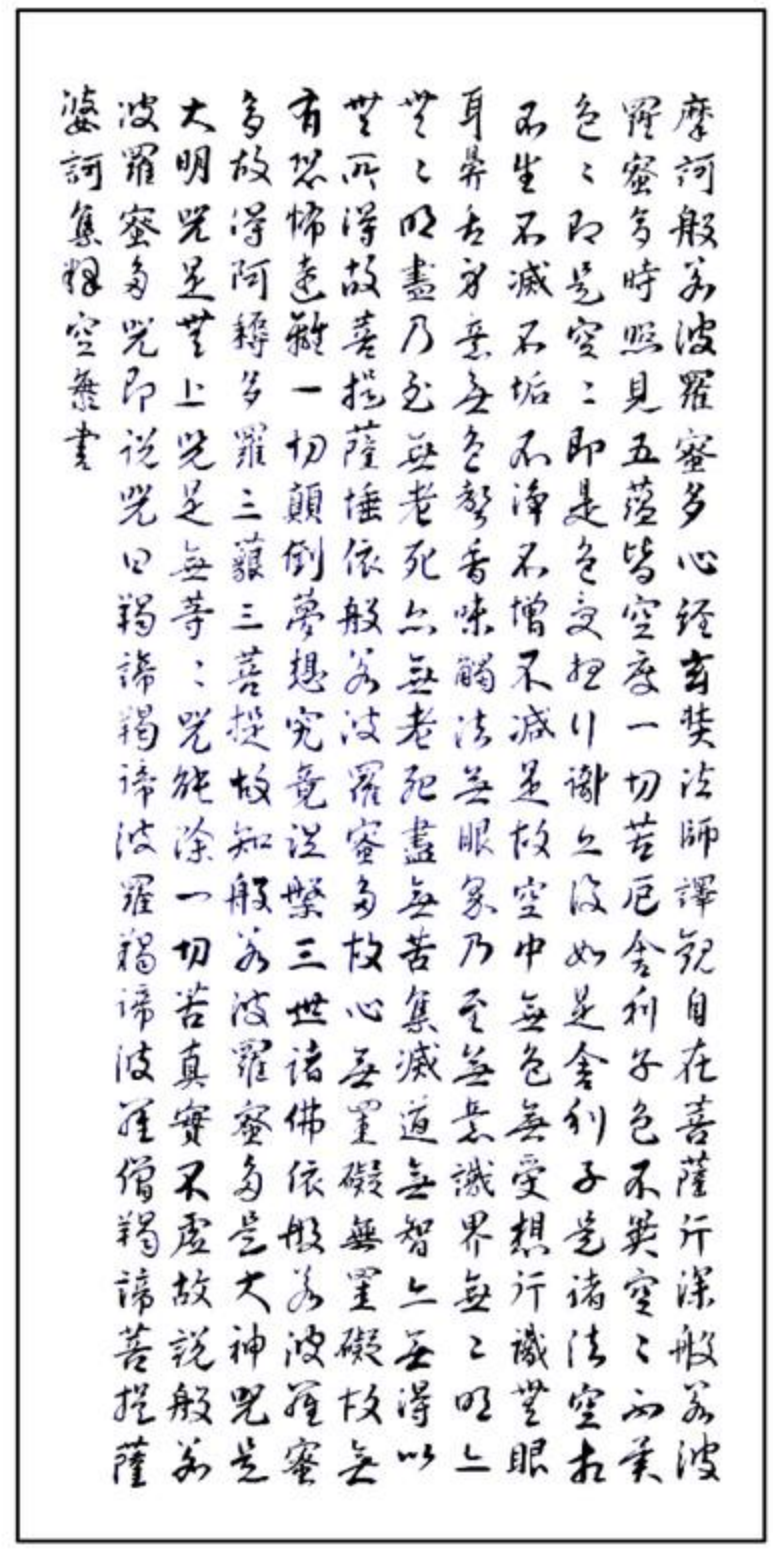
30

藤井基弘　ＯＢ

臨書　行草書　空海『集釈空海書　般若心経』　全紙

「観自在菩薩……（略）」

〝三筆〟に数えられる空海の書を一度臨書してみたいと思ったのだがなかなか手を出せなかったが、来年後期高齢者に属するのを機会に手元にあった『集釈空海書』を臨書してみた。一字一字臨書していると、小説で読んだ〝空海〟の情景が思い出され、畏怖の念を通り越し懐かしささえ感じた。





31　森ちひろ　二回生
臨書　行書　王羲之『蘭亭叙』　半切

「羣賢畢至少長咸集此地有崇山峻」
今年の春に書道部に入部し、書展で出す初めての作品です。先輩方からアドバイスをいただきながら、京都の地で書道を再開できた喜びと臨書の難しさをひしひしと感じながら書きました。



33　山科直也　四回生
創作　行書　『芙蓉楼送辛漸』　聯落

「寒雨連江夜入呉平明送客楚山孤洛陽親友如相問一片氷心在玉壺」
この漢詩は左遷された作者が洛陽に帰る辛漸に、洛陽に着いたら親友に玉壺の氷のような澄んだ気持ちは残っていると伝えてほしいという内容で、自分の近況と重ね、自分の書道部で培ったものや情念を込めたのでそういったものを感じてもらえると幸いである。

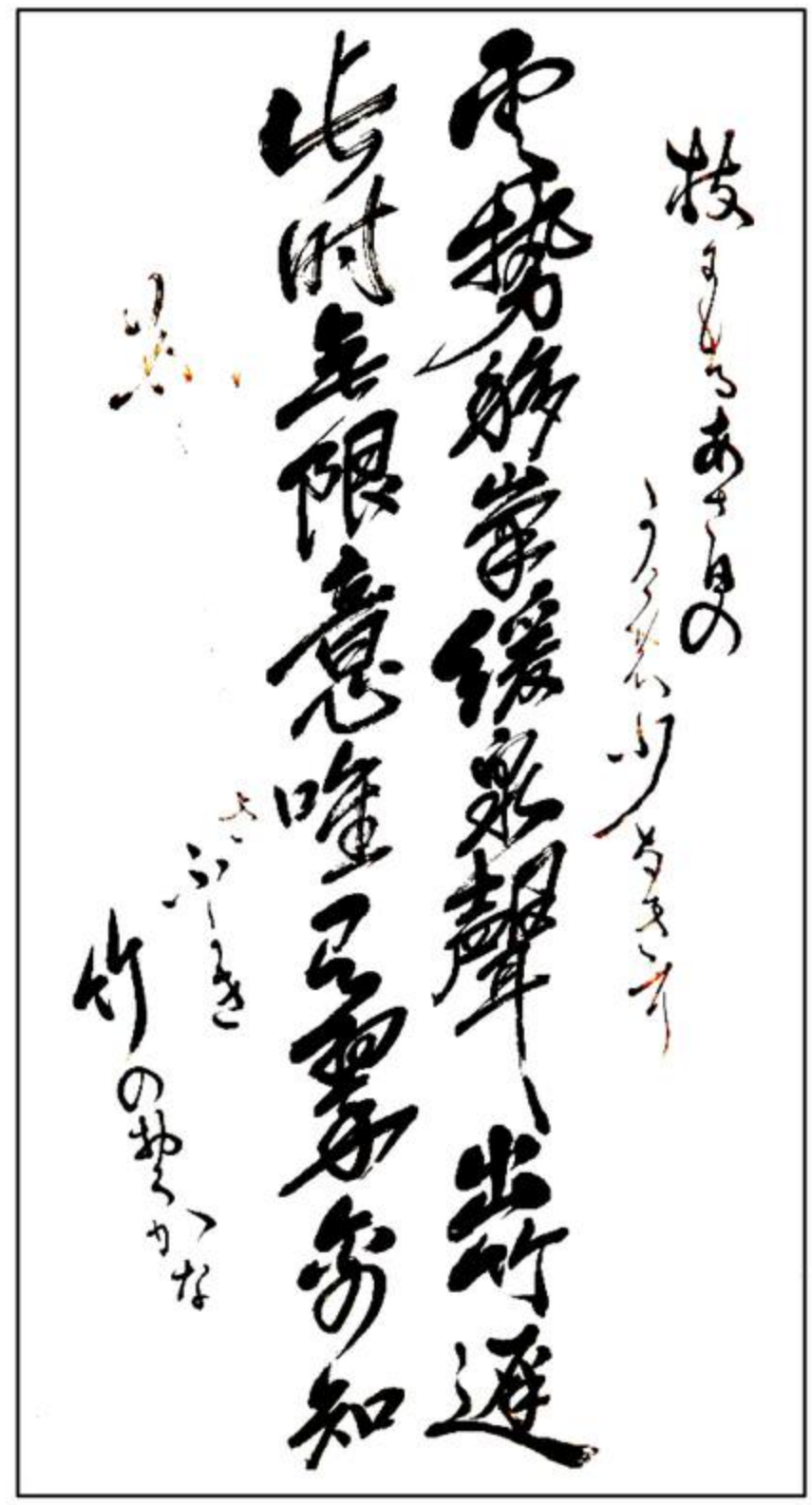
32　山崎夏野　四回生
臨書　草書　孫過庭『書譜』　半切

「不悟習草将迷假令薄解草書粗傳隷法則好溺偏固自閡通規詎知心手會掃若同」
書道部にいられるのもあと一年となりました。悔いのないように活動したいですね。

34　吉岡智志　二回生
臨書　行書　王羲之『集字聖教序』　半切

「是以窺天鑑地庸愚皆識其端明陰」
初の行書となりました。楷書しかやったことがなくまだまだ未熟なのでもっと頑張りたいものです。

35　金山優作　二回生　・　佐山侑莉　二回生
創作　行書・かな　『夏の清陰』　全紙



「雲勢移峰緩泉声出竹遅此時無限意唯有翠禽知
枝にもるあさひのかげの少なきにすずしさふかき竹のおくかな」

夏らしい漢詩と和歌を行書と仮名で書きました。漢詩は邵康節の「福昌縣會雨」で、雲の流れ、竹林をもれる泉聲の情緒を詠んだ詩です。和歌は藤原為兼の作で枝が光を遮り、涼しさが感じられる竹林の奥を詠んだものです。中央に佇む力強い行書と揺れ動く葉の如き仮名の調和がとれているでしょうか。

36　中村直樹　三回生　・　原誠人　三回生
臨書　蘇軾・黄庭堅『黄州寒食詩巻』／『黄州寒食詩巻跋』　巻子



「自我来黄州已過三寒食年々欲春惜……（略）
東坡此詩似李太白猶恐太白有未處……（略）」

書道史における大家蘇軾が黄州流罪中に詠んだ詩二篇を書いた『黄州寒食詩巻』。それに親友黄庭堅が卓越した跋を加えている。宋代屈指の書家であり、かつ親交の深い二人の作品は、各々の代表作の一つとなっている。親友との合作が代表作とされているなんて、二人も草葉の陰から喜んでいることでしょう。



37 全体合作
創作 『心理テスト』
百四十四字の漢字の中から最初に見つけた三つの熟語が、あなたの人生にとって重要なものです。少し前に流行った心理テストの京大書道部版を部員全体で合作してみました。是非お気軽にお楽しみください。

38 三回生合作
創作 『思い出のあの書を再び』
早いもので幹部回生としての一年がこの書展を最後に終わろうとしています。その節目として、今回の三回生合作では、書道部入部以降書いてきた過去の作品を一人一人が振り返り、特に思い入れのある作品を再現してみました。以前書いた時よりも少しでも上達していればよいなぁと思うばかりです。

39 二回生合作
創作 『他己紹介』
個性豊かな二回生。お互いが、それぞれの印象を漢字一文字や短文で表現してみました。一人一人のキャラクターをなんとなくでも感じていただけたら嬉しいです！

40 新入生合作
創作 『難読漢字しりとり』
書道部に入って初めての書展作品です。新入生皆で知恵を出し合って難読漢字を書きました。実は読みがしりとりになっています。皆さんは読めるでしょうか。是非、挑戦してみて下さい。

○禅居庵

41

上西隆太　修士一回生
創作　調和体　『一日一歩』　半切二分の一横

「一日生きることは一歩進むことでありたい」

日本人として初めてノーベル賞を受賞された、湯川秀樹博士による言葉です。不慣れな調和体作品に挑みましたが、この言葉通り一歩ずつ成長できたでしょうか。ところで、我が京大書道部には湯川先生が以前顧問をされていたという言い伝えがあります。真偽の程や如何に。



42

牛山泰喜　修士一回生
臨書　楷書　作者不詳『魏霊蔵薛法紹造像記』　半切

「東照之資闕兜率翅頭之益敢輒罄家財造石像」

ずっと書いてみたかった北魏楷書に挑戦しました。作品展などで上手な書家の書く独特な雰囲気をイメージしながら書くのですが、筆の扱いやバランスのとり方も普通の楷書とは異なっていて苦戦しました。少しでもこれからの糧になればいいかなと思います。力強く生きていきたいです。



43

角谷遊野　修士一回生
創作　楷書　『和而不同』　半切

「和而不同」

和而不同（わじふどう）とは、人と仲良くするが、むやみに同調はしない、自分自身の意見や態度を持ち続けるという意味です。ちょうど四年前にも同じ題材で出品しましたが。少しは上手くなっていると良いのですが。



44　金岡杏祐　二回生
臨書　行書　文徴明『行書詩巻』　半切

「滿路碧烟空自散月中徐棹酒船回高」
前回の書展で、先輩の文徴明『行書詩巻』の臨書を見て格好いいなと思い、今回文徴明を臨書することにしました。右上がりが特徴的な文徴明の法帖は臨書していて楽しいです。最近は大学の講義のメモをするときにも右上がりの字を書くように意識しています。



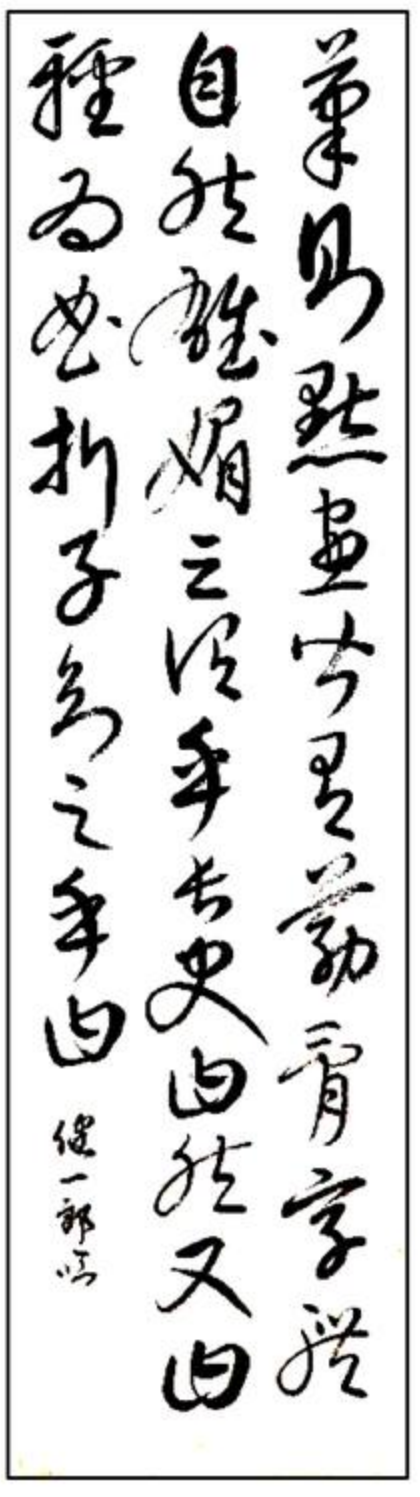
45　金山優作　二回生
臨書　隷書　何紹基『臨漢碑　李剛石室殘字』　全紙

「東郡君爲荊州刺史時。梁高行。烏桓。無鹽醜女。樊姬。」
またもや何紹基、そして初の隷書作品です。これは隷書?とよく言われますが一応隷書だと言い張ります。キレのある波磔といったわかりやすい隷書の特徴は乏しいですが、独特の魅力に惹かれます。



46　郡健一郎　三回生
臨書　草書　康里子山『述筆法巻』　半切

「筆則默晝皆有……為曲折子知之乎曰」
はじめての草書です。何も分からない所から始まりましたが、作品を書いていく内に色々と勉強することができ、とても楽しかったです。



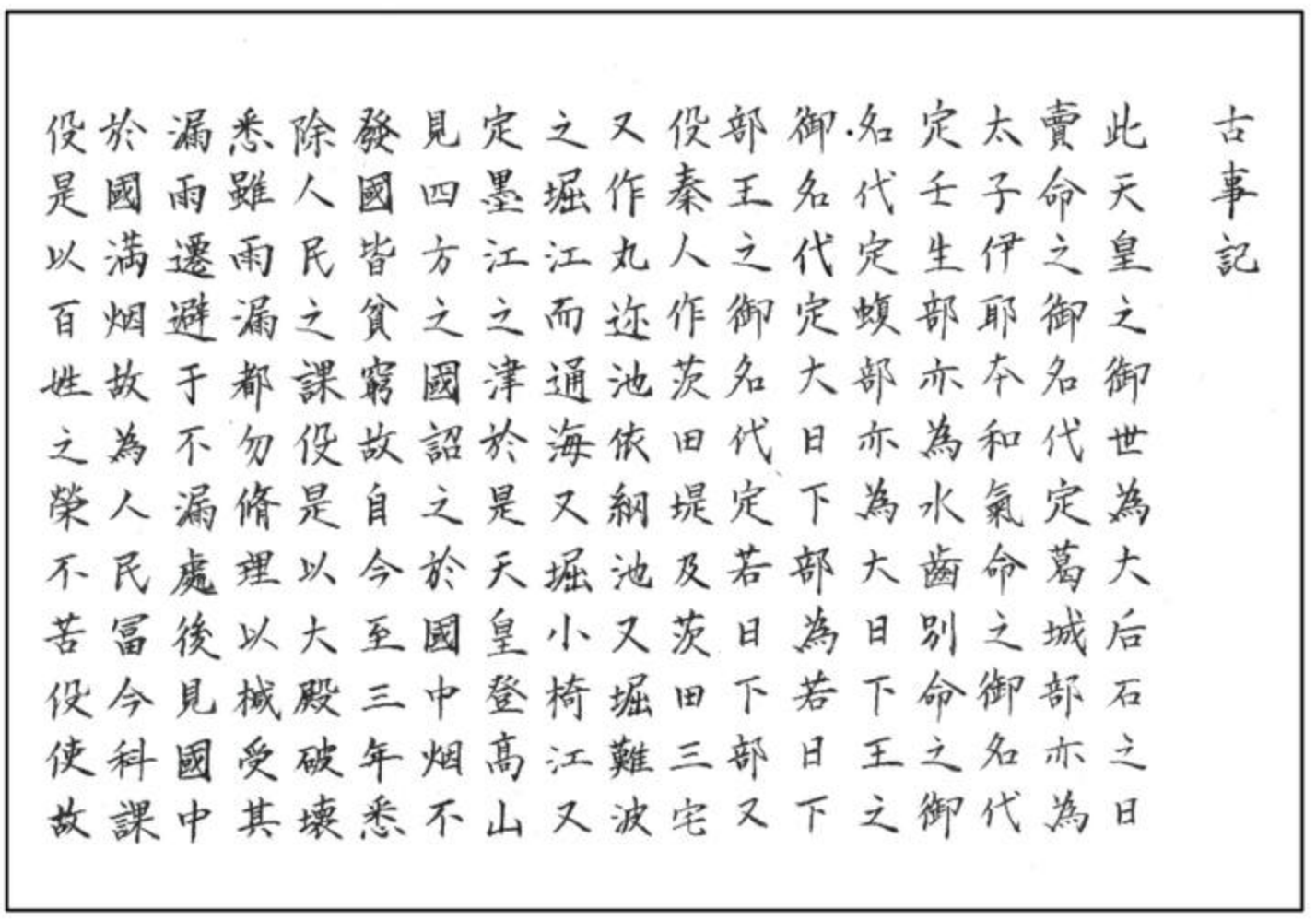
47　近藤泰仁　三回生
臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　半切

「金無欝蒸之氣微風徐動有凄清之」
金無くて欝なる話かなと思ったらそうでもないみたいです。お金無くて他人事やないなおもて書きました。無職です。バイトします。書道ど素人です。がんばります。



48　米田景　三回生
創作　楷書　『古事記』　巻子

「此天皇之御世為大后之日賣命……（略）」
『古事記』シリーズ第二弾。今回は仁徳天皇と顕宗天皇のお話の一部です。
天皇陛下の譲位から経済の問題まで、現代社会の問題解決の糸口は『古事記』に隠されている……？


古事記
此天皇之御世為大后石之日
賣命之御名代定葛城部亦為
太子伊耶本和氣命之御名代
定壬生部亦為水歯別命之御
名代定蝮部亦為大日下王之
御名代定大日下部為若日下
部王之御名代定若日下部又
役秦人作茨田堤及茨田三宅
又作丸迩池依網池又堀難波
之堀江而通海又堀小椅江又
定墨江之津於是天皇登高山
見四方之國詔之於國中烟不
發國皆貧窮故自今至三年悉
除人民之課役是以大殿破壊
悉雖雨漏都勿脩理以椀受其
漏雨遷避于不漏處後見國中
於國滿烟故為人民富今科課
役是以百姓之榮不苦役使
故

49　阪井田有紗　三回生
臨書　草書　陳奕禧『七言絶句幅』　半切

「先輔秉京師、翠簟臨門或有之。獨是遠□論家食、無人得似荷恩私。丁亥仲冬、奕禧書於呉山東樓。」
書としての美しさに惹かれた法帖ですが、内容は情勢を嘆いたものです。書道が芸術分野として扱われることの多い今と違い、普段の筆記具でもあったのだと感じさせられます。おもしろいですね。



50　佐山侑莉　二回生
臨書　行書　呉昌碩『行書幅』　全紙

「坐觀雲起思摩詰　獨樹老夫懐杜陵　心地寒冰人木殭　熱中看尔汗如蒸」
大胆な筆運びを意識し、迫力のある作品を目指しました。初めて全紙作品を書いたため、すっきりまとめるのに苦労しました。ご批評よろしくお願いいたします。



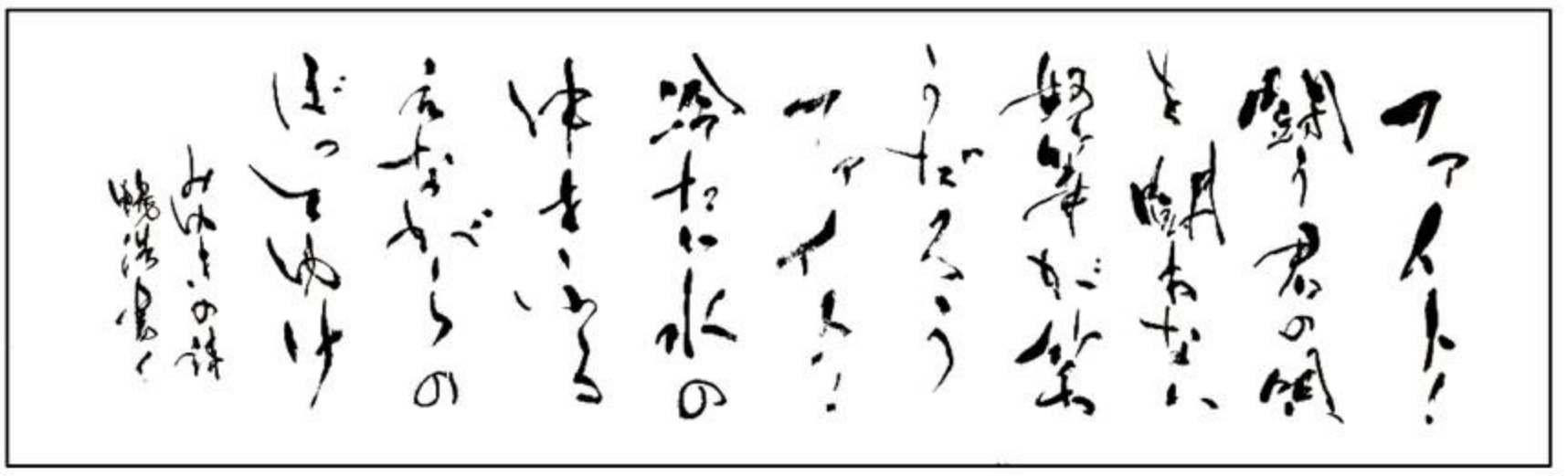
51

白谷暢浩　修士一回生

創作　調和体『ファイト！』　半切横

「ファイト！闘う君の唄を闘わない奴等が笑うだろう
ファイト！冷たい水の中をふるえながらのぼってゆけ」

旅立った友たちへ。



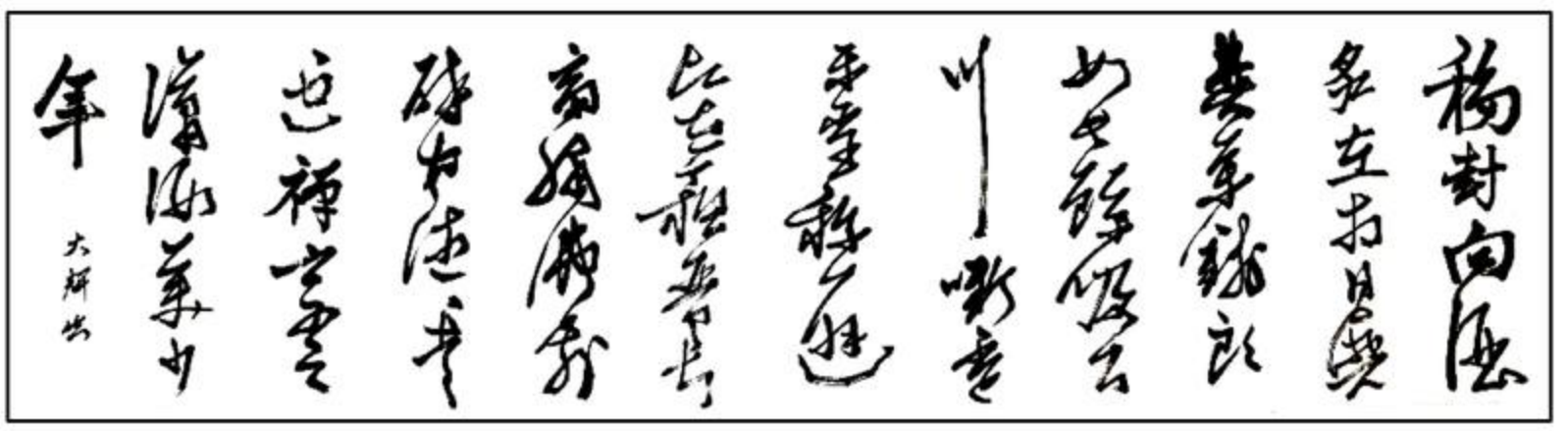
52

橘大輝　三回生

臨書　草書　張瑞圖『杜甫飲中八仙歌巻』　半切横

「移封向酒泉左相日興費萬錢飲如長鯨吸……(略)」

もう三回生。時が過ぎるのは早いです。



53

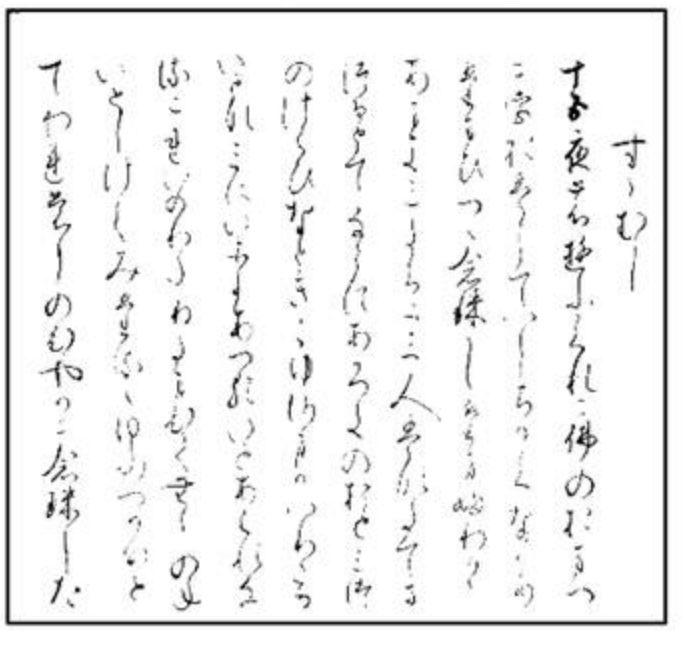
徳田寛生　三回生

臨書　かな　『源氏物語絵巻　鈴虫』　半紙三枚

「すずむし

十五夜のゆふぐれに、仏のおまへに宮おはして、はしちかくながめたまふ。わかきあまぎみたち二、三人、はなたてまつるとてならすあかつきのおと、みづのけはひなどきこゆ。さまかはりたるいとなみにいそきあへる、いとあはれなるに、れいのわたりたまひて、「むしのねも、いとしげくみだるるゆふべかな」とて、われもしのびやかに念珠した（パンフレットには一枚目のみ掲載）」

今回は少し長い仮名作品に挑戦しました。美しい料紙に作品を書くのは大変気持ちの良いものでした。



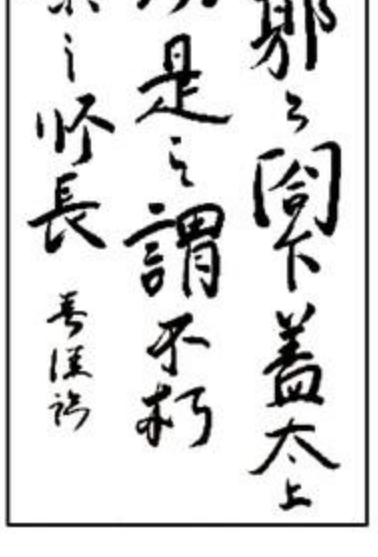
54

竹内春佳　四回生

臨書　行書　顔真卿『争坐位文稿』　半切

「右僕射定襄郡王郭公閣下蓋太上有立徳其次有立功是之謂不朽抑又聞之端揆者百寮之師長」

何気なく手にとって選んだ作品。内容は抗議文であり、その書風は力強く重みがあります。それを表現しようと約一年ぶりに筆を執りました。



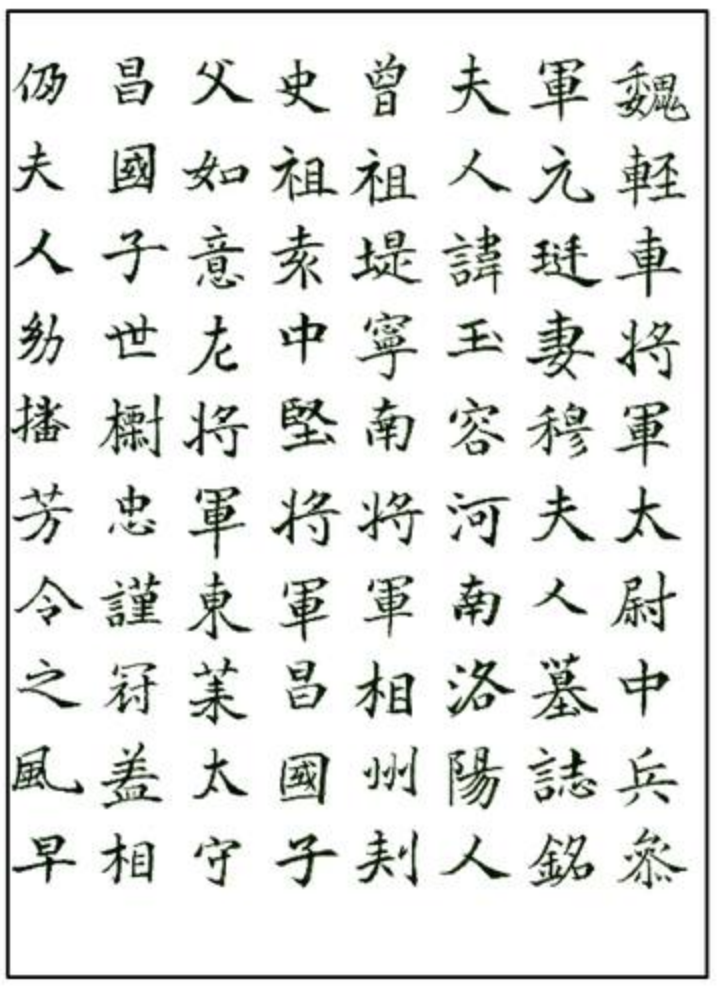
55

仲村康太郎　三回生

臨書　楷書　作者不詳『元珽妻穆玉容墓誌銘』　半切

「魏輕車將軍太尉中兵參軍元珽妻穆夫人墓誌銘。夫人諱玉容。河南洛陽人。曾祖堤。寧南將軍……（略）」

北魏から隋・唐に至るまで、楷書は大きな変化が見られます。整然と屹立する唐楷は楷書の極致であると言えますが、私はむしろ、生々しい野趣があり、ときに大胆な造形を見せる北魏や隋代の楷書の方に魅力を感じています。独特な筆遣い、多少の稚拙感が作品にプラスの方面にはたらけば、と思いつつ書いてみました。



56

仲村康太郎　三回生
創作　調和体　『夕陽を見ているか』　巻子

「夕陽が沈む空を見ているか　ときが過ぎるその背中は美しいだろう　イエス　それなりの今日が終わり　全てリセットする夜がくるよ　家路を急ぐ君は一人きりどうして自分のことを誉めてあげないのか　ねえちゃんと見てあげようよ　君がきみらしく生きてること」

AKB の隠れた名曲であり、ときに勇気や自信をくれる一曲である。自分の力を信じ、好みのムジナの筆を揮った。NASDAQ か Aflack か、そんな名前のヤ〇ザな組織に見つからぬようにと祈りつつ……。

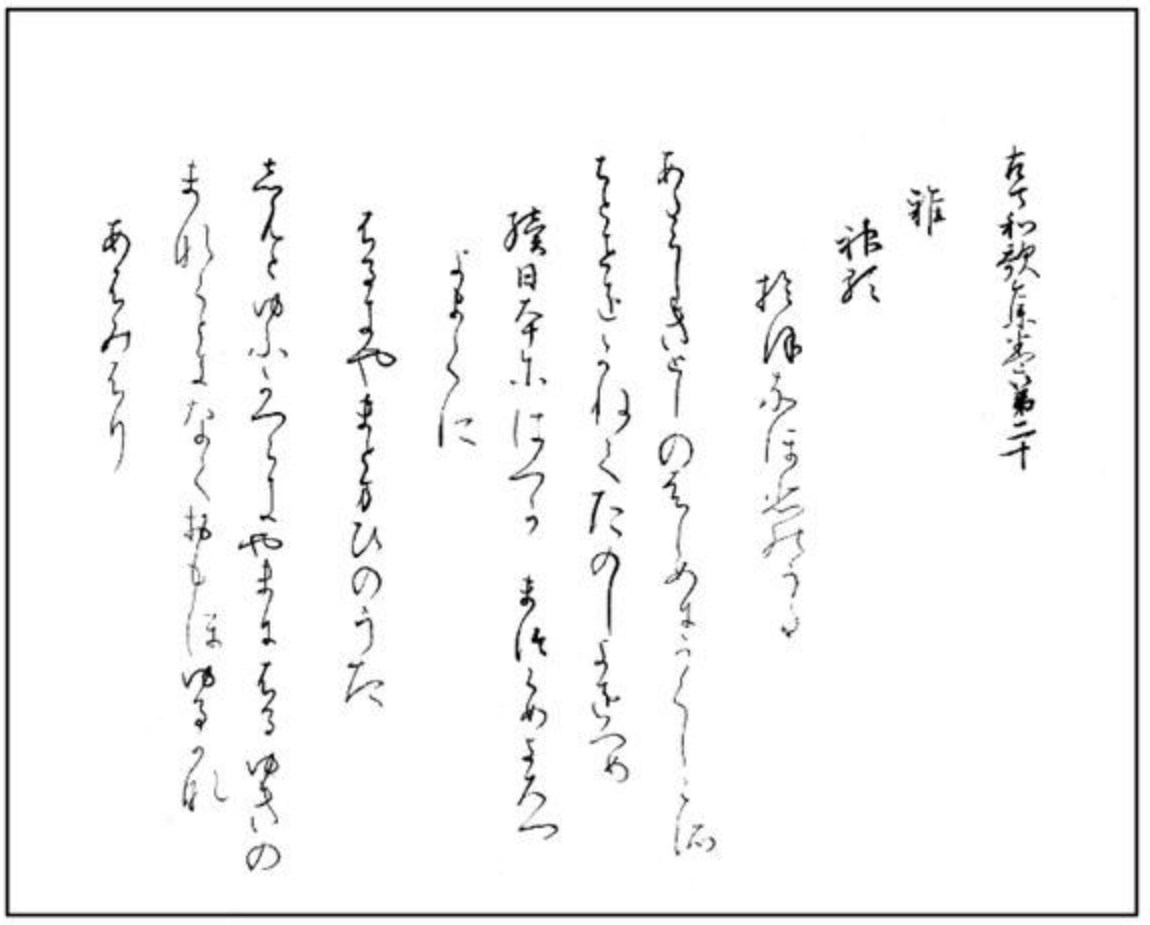


57

中村直樹　三回生
臨書　かな　伝紀貫之『高野切第一種』　巻子

「古今和歌集巻第二十　雑　神歌　おほ（於）ほ（保）な（奈）ほび（悲）の（能）うた（多）　あた（多）らしきとしのはじめ（者）に（尓）か（可）くしこそ（所）ちとせ（世）をか（可）ねて（弖）たのしよをつめ　続日本に（尓）はつか（可）まつ（徒）らめよろづよまで（弖）に……（略）」

『高野切』は、最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』の現存最古の写本として知られています。仮名の方に目が行きがちですが、漢字も中国の書をそのまま取り入れるのではなく、日本人の好みや文字にあった独自の書を確立しています。今回はただ字形をとらえるだけではなく、「和様の書」であることも意識して臨書しました。



58

中村勇真　二回生

臨書　篆書　傅山『遊仙詩』　半切　四連

「醉挾青烟一道飛。神儀騎得白鸞歸。寶珠如卵纔呑罷。便入天門侍紫微。……（略）」

清の書家、傅山の遊仙詩十二屏から四屏を抜粋して臨書しました。遊仙詩とは、俗世を離れて仙界で遊ぶことをうたった詩のことです。書体の大胆な変化と、傅山の自由奔放で型にはまらない書をお楽しみ下さい。ちなみに私は、型から外れるのが大の苦手です。



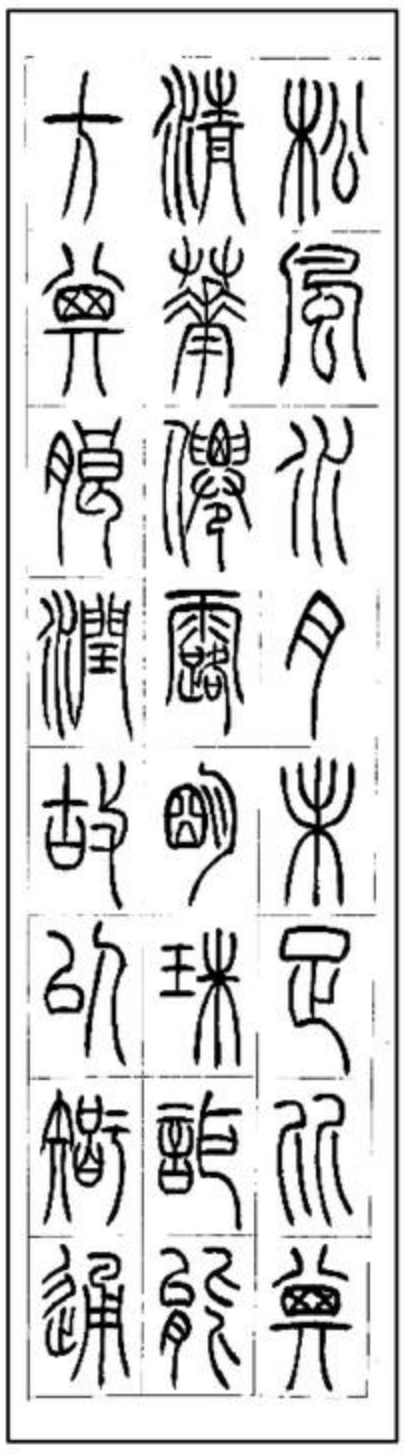
59

橋詰都　三回生

臨書　篆書　呉熙載『聖教序』　半切　二連

「松風水月未足比其清華儀露明珠詎能方其朗潤故以智通無累神測未形超六塵而迴出隻千古而無對凝」

細身で美しい呉譲之の篆書を書きました。きっちりとした字は性に合っている気がします。いつか全臨してみたいです。



60

原誠人　三回生

創作　調和体　『戯作三昧』　映像作品（約五分）

「（頭の中の流は、）丁度空を走る銀河のように、滾々として溢れて来る。彼は遂に全くその虜になった。……」

芥川龍之介『戯作三昧』の一節を『Czardas』（作曲：V. Monti）に乗せて。俗に「書道パフォーマンス」と呼ばれる趣向ですが、今回は随所で勉強中の王羲之や黄庭堅、平安期の書に取材し、正統の「書」表現に歩み寄ることを志向しました。変格に走るのは未熟からの逃避と懼れますが、さりとて悔いも残したくなく……。

61

原誠人　三回生

臨書　和様（または行書）　伝橘逸勢『伊都内親王願文』　二六横

「菩薩戒弟子従五位下藤原朝臣平子稽首和南。聞惟父惟母慈之悲之者…（略）」

八三三年、伊都内親王が生母藤原平子の遺言により興福寺に土地を寄進した際の願文で、書としては「超絶の作」「まさに神品」（鈴木翠軒）と評される劇跡です。不遇の三筆・逸成の筆跡は「伝」と書されるこれが（ほぼ）唯一。しかしこの圧倒的な天才たるや！　拙臨もその魅力が誤解されて従い程度の仕上がりならよいですが……。



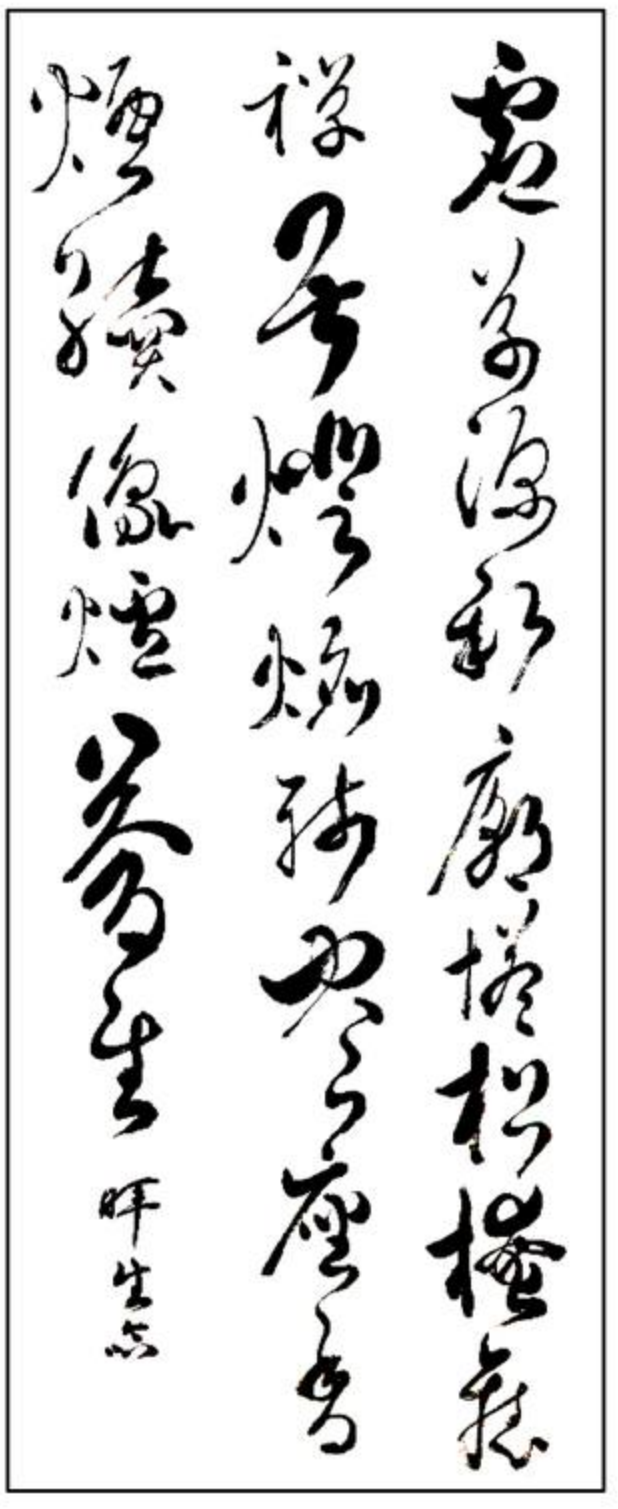
62

一二暉生　二回生

臨書　草書　嵯峨天皇『哭澄上人詩』　聯落

「虚。草深新廟塔、松掩旧禅居。燈焔残空座、香煙続像炉。蒼生」

力強い線がありつつ繊細な線もあるところが書いていて楽しい作品でした。まだまだ未熟ですが、多少なりとも嵯峨天皇の運筆が体得できていれば幸いです。



63

松尾和輝　三回生

臨書　行書　王羲之『集字聖教序』　半切

「味道飡風鹿苑鷲峯瞻奇仰異承至言」

今回久しぶりに行書に取り組むに際して行書について改めて調べてみましたが、それらすべてを意識して書くことの難しさを僭越ながら実感しました。なるべく流れを途切れさせないことに特に重点を置きました。不十分な点は多々ありますが、書いている時間は楽しかったので十分満足しています。



64

平井達也　二回生

臨書　金文　作者不詳『中山王セキ方壺』　全紙

「隹十四禾中山王セキ命相……（略）」

神秘的な文字、繊細かつ強靭な線質、中国戦国時代の金文です。「あー、書道部に入ってよかった」（BGM:Dirty Work）



平成丁酉孟夏　臨中山王譽方壺　達也　於滦和院

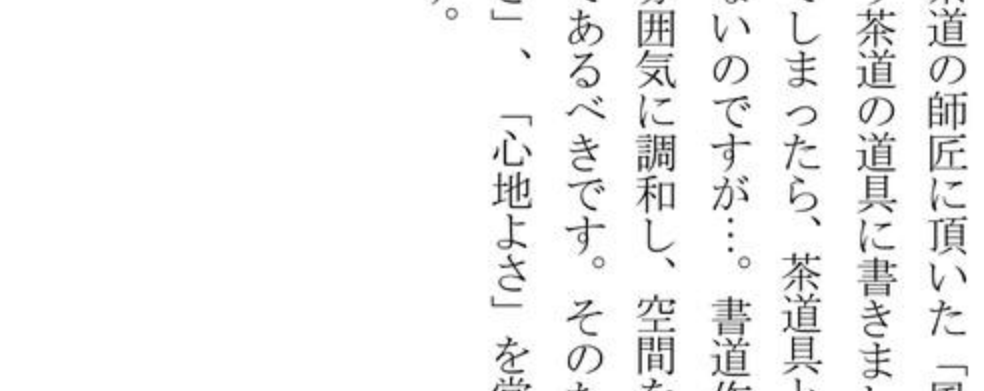
65

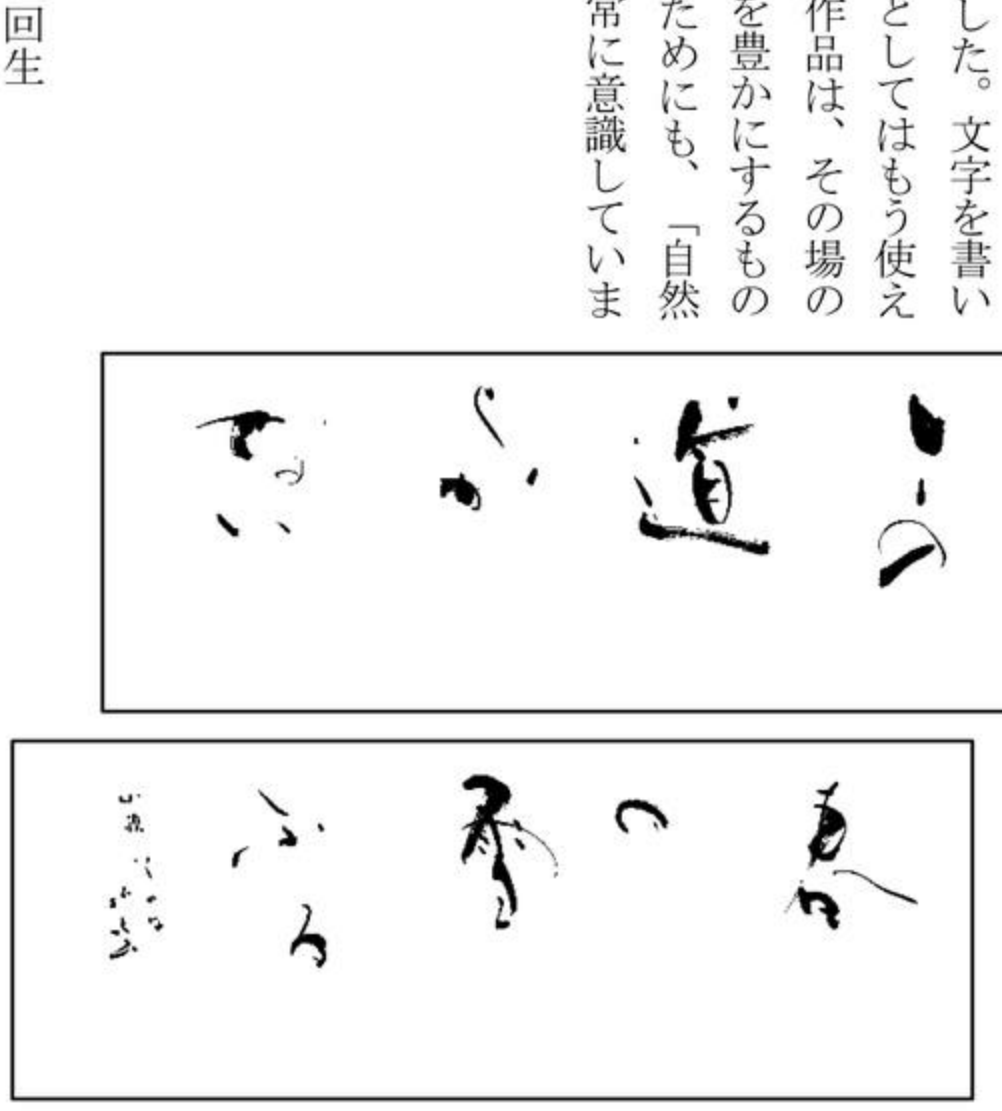
深谷拓未　四回生

創作　調和体　『山頭火句』　95cm×60cm　二曲

「この道しかない春の雪ふる」

茶道の師匠に頂いた「風炉先屏風」という茶道の道具に書きました。文字を書いてしまったら、茶道具としてはもう使えないのですが…。書道作品は、その場の雰囲気に調和し、空間を豊かにするものであるべきです。そのためにも、「自然さ」、「心地よさ」を常に意識しています。





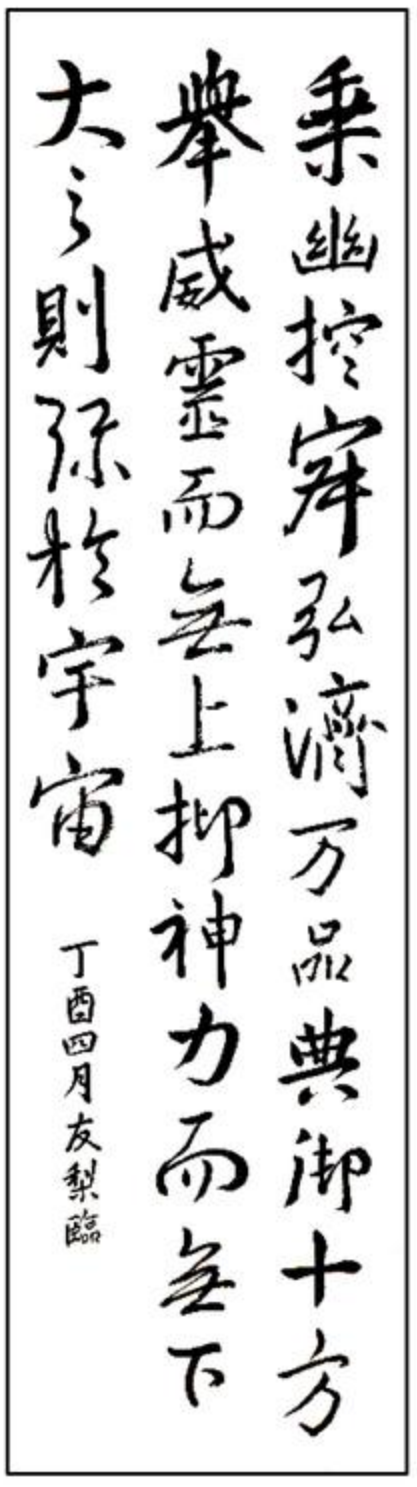
66

村上友梨　二回生

臨書　行書　王羲之『集字聖教序』　半切

「乗幽控寂弘濟万品典御十方擧成靈而無上抑神力而無下大之則彌於宇宙」

行書の練習がしたいと思い、集字聖教序を選びました。行書らしい線を出すのに苦労しました。



丁酉四月友梨臨



67　矢野凱己　四回生
創作　かな　『四季』　半懐紙二分の一　四連

「（春）さくら花 さきにけらしも あしひきの やまのかひより みゆるしら雲
（夏）ほととぎす 人まつやまに なくなれば 我うちつけに こひまさりけり
（秋）あきかぜに 霧とびわけて くるかりの 千世にかはらぬ こえきこゆなり
（冬）ふる雪を そらにぬさとぞ たむけつる 春のさかひに 年のこゆれば」

四種類の構成の違いを出しながら、全体では起承転結をイメージした一つの作品としてまとめました。個人的には、やわらかいタッチのというよりは漢字や変体仮名をやや多めに取り入れた見応えのある仮名が好きなので、そんな仕様になっております。



68　山口和樹　四回生
創作　行書　『春逐鳥聲開』　半切

「春逐鳥聲開」
この五文字は『あひるの空』で順番に解説すると「百春 トビ 空 千秋 モキチ」。そんなイメージです。



69　山科直也　四回生
創作　行書　『鶴舞千年樹』　半切

「鶴舞千年樹」
作品の意味としては千年も変わらず緑を保つといわれる松と空を舞う鶴という長寿の象徴が並んだ光景のことである。この作品を見ていただいた方々の健康を願って心に残る作品になればと思う。

70

渡辺顕　四回生

臨書　行草書　空海『風信帖』　半切

「風信雲書自天翔臨披之閲之如掲雲霧兼」

今年の三月、高野山に行った時に弘法大師の直筆の書（風信帖ではないですが）を見て感動しました。印刷物では伝わらない荘厳な雰囲気でした。本作品も、パンフレットでは伝わらない雰囲気が上手く出せていたらよいと思います。率直なご感想、ご講評をよろしくお願いします。



71

勝野初紀　二回生　・　金山優作　二回生

創作　隷書・かな　『春の来訪』　全紙横

「近来風日麗万物奢春光烟軽新艸緑林暖早花芳餘雪落梅院遊絲垂柳塘鴻雁初遵渚帰飛向朔方

蒼雲のそぐへを見ればたちわたる春はまどかにいやはるかなり」

春の訪れを詠んだ漢詩と和歌を隷書と仮名で書きました。漢詩は有智子内親王の「奉和春日作」で暖かくなってきた気候や芽吹いてきた草花に春の訪れを感じた詩です。和歌の方は長塚節の歌で蒼雲のたなびく彼方から春が訪れる様を詠んだものです。隷書を器に見立て、春らしい色で書いた仮名。華やかに仕上げました。



72

勝野初紀　二回生　・　野田智子　二回生
創作　行書・かな　『水月』　全紙

「月舟移霧渚楓楫泛霞濱……（略）
おほぞらのつきのひかりしさむければかげみし水ぞまづこほりける……（略）」
かなと行書は水月というタイトルにあるように月と水に関する歌を集めました。かなと行書がうまく調和できるように工夫しましたが難しかったです。この作品から月と水の情景が目に浮かぶようであれば幸いです。



73

矢野凱己　四回生　・　山口和樹　四回生
創作　篆刻・調和体・前衛　『風』　24cm×80cm

「胡馬依北風（白文）　越鳥巣南枝（朱文）
忘れがたきふる郷」
大きく「風」と書いていますが、今回使った筆の穂は藁のような草を用いたものです。これと淡墨の相性は素晴らしく、線の可能性をどこまでも感じさせてくれるものでした。大胆で上品、かつ全体で見ても部分で見ても面白い作品にしたいものです。



【顧問・部員紹介】

顧問：京都大学大学院文学研究科教授　宇佐美文理
京都大学人文科学研究所図書掛　行友三輪子

技術顧問：日展会友　書道家　寺本蒼玄

一回生

文　石本森羅
工　市川拓真
工　鵜川大輝
文　牛田聡実
法　大橋葵
農　小池莉穂
工　越田真由
同志社　近藤祐香
法　坂本和歌子
医　澤水里奈
工　鈴木渉
法　須藤祥吾
同志社　中岡大吉
工　中林亮
同志社　野田恵子
工　花原遼祐
工　松尾有輝也
工　安田直記
法　湯宮颯太
理　吉田凌祐

二回生

法　安達光寿
工　覚道直治
京学　勝野初紀
法　金岡杏祐
工　金山優作
京薬　鬼頭由里香
工　金祺民
工　邢書禹
医　佐山侑莉
法　建部壮一郎
理　中村勇真
農　野田智子
医　野間優美
文　挾一暉生
工　一井達也
文　平上友梨
法　村ちひろ
女　森岡智志
農　吉

三回生

工　阿部朱夏
医　今村朱里
法　上村香鈴
医　浦川真由子
法　小野日菜乃
教育　神﨑七海
工　木上博之
工　郡健一郎
農　小林由佳
法　米田景
工　近藤泰仁
農　阪井田有紗
文　佐武千寛
農　杉本舞
工　角裕介
文　橘大輝
法　徳田寛生
文　仲村康太郎
文　中村直樹
工　橋詰都
理　原誠人
工　原田拓実
同志社　平野晶子
農　松尾和輝

四回生

造形　大池らら
医　岡本晴香
経済　笠原知生
法　川口功
府医　木高早紀
農　木下有羽
医　小森千裕
法　清水麻友美
医　下坂桃代
薬　竹内春佳
工　津金澤秀行
文　永田成望
総人　深谷拓未
農　堀場菜摘
造形　眞嶋優一
法　三村祐貴子
工　宮部大志
工　矢野凱己
工　山口和樹
農　山崎夏野
工　山科直也
工　渡辺顕

五回生

法　山﨑絢香

七回生

総人　平野泰隆

修士一回生

農　新井一矢
薬　荒巻拓哉
理　上西隆太
工　牛山泰喜
工　闇姝恒
工　角谷遊野
農　釜阪紘平
工　藏岡凌平
大教　島津七明
工　白谷暢浩
工　宗哲仁
理　疋田研一
人環　山脇謙郎

修士二回生

法　大石龍太
農　片野裕太
工　河合翼
経済　柯潔
工　石博昭
農　中谷百花
情報　藤田雄也
農　家倉凌

修士三回生

情報　鈴木貴也

博士一回生

法　大泉陽輔
医　川上澄香

博士課程修了

地環　藤井基弘

掛軸 文房四宝 和紙の店 書楽

〒605-0012 京都市東山区東山三条東入南側
TEL.075-762-2330／FAX.075-751-6571
syoraku@aioros.ocn.ne.jp
〈日曜・祝日定休〉

Calligraphic Item Specialty Store 書遊 検索
篆刻用品・書道用品・額・軸装はお任せください。
書遊
http://www.shoyu-e.com/
AM.10:00－PM.6:00

奈良本店 駐車場完備
奈良市今辻子町37
TEL0742-23-5547 FAX0742-20-2261

大阪店
大阪市福島区福島 5-14-6クレセントビル2F
TEL06-6458-8808 FAX06-6456-4077

東銀店
京都市中京区高倉通 三条下る丸屋町 164
TEL075-251-7800 FAX075-251-7802

新潟営業所
TEL 025-374-5510 FAX 025-374-5511

札幌アメミヤ 姉妹店
札幌市中央区南一条西 2丁目5南一条ビル 5F
TEL011-398-9400 FAX011-398-9401

筆・墨・硯・書画用紙・色紙短冊・日本画用具
株式会社 松楳園
〒600-8075 京都市下京区柳馬場通仏光寺下ル
TEL（075）351－6380(代)
FAX（075）361－8006
http://www.shoubaien.co.jp.

香/筆/和風文具/香道具/茶道具
鳩居堂
〒604-8091 京都市中京区寺町姉小路 上ル下本能寺前町 520
営業時間 10～18 時 定休日(日曜日)
TEL. 075(231)0510 FAX. 075(221)5987
地下鉄東西線市役所前駅下車 5 番出口
http://www.kyukyodo.co.jp

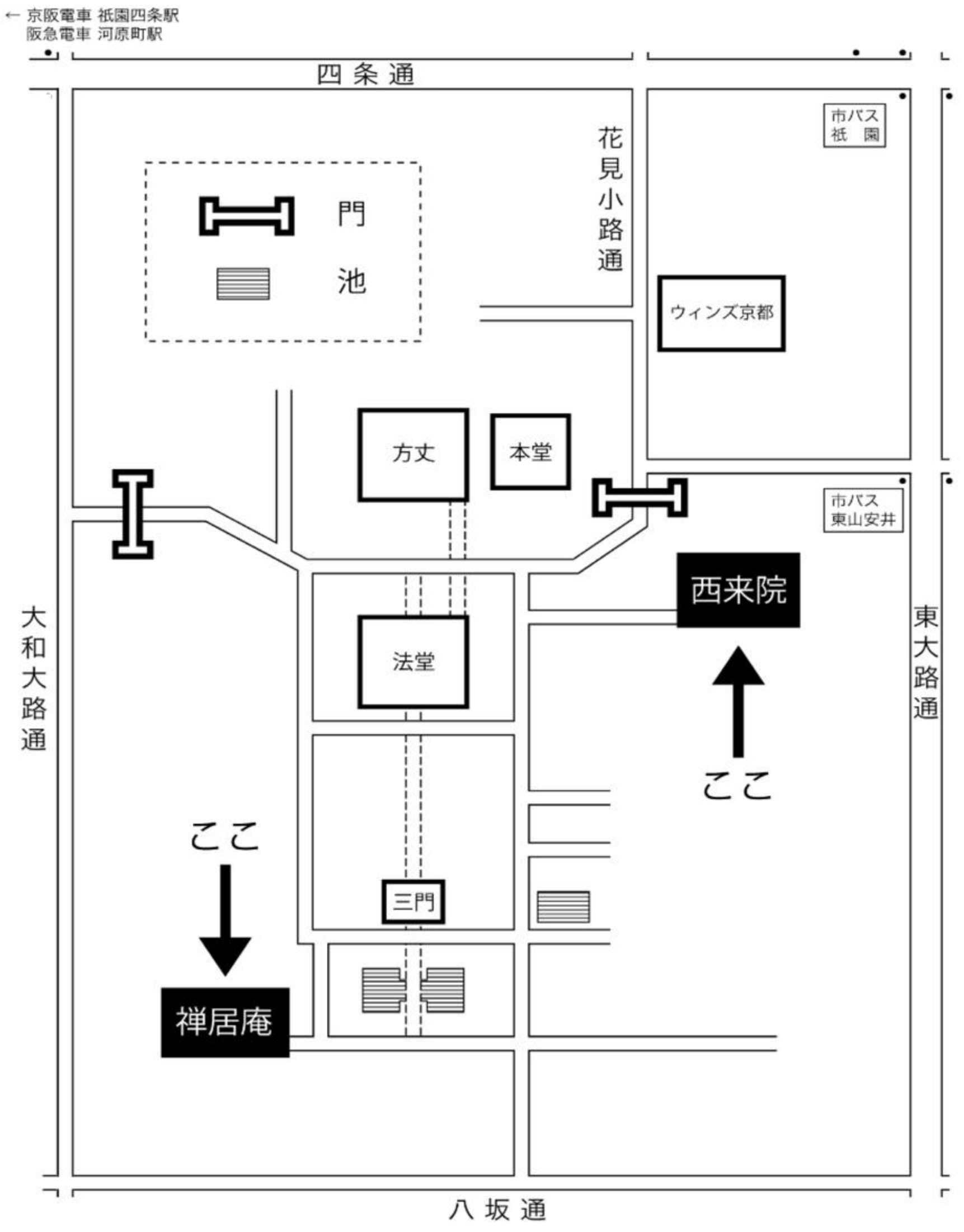
京筆・京文房
龍虫堂
京都 〒604-0916 京都市中京区寺町通二条上ル
TEL.075-252-4120 FAX.075-252-0006
東京 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋四丁目六の二 東洋美術印刷本社ビル一階
TEL.03-3239-0733 FAX.03-3239-0731

文具四寶（筆・墨・硯・紙）和紙工芸品 書画作品
書芸サロン 賛交
二条店 〒604-0931 京都市中京区二条通河原町西入北側
TEL・FAX：075-222-0390
E-mail：info@shoga-sankou.co.jp
URL：http://www.shoga-sankou.co.jp
株式会社 賛交社 本社 〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町 27
TEL：075-572-8964／FAX：075-572-8905

かな料紙・京染和紙
加工紙・画仙紙・半紙他
書道用和紙の専門店
紙の津久間
京都市下京区新町通花屋町下ル
TEL（075）371－8186（代）
FAX（075）371－8189

墨筆硯紙 書道用品一式
京都 古梅園
〒604-0916
京都市中京区寺町二条上る
TEL（075）231－1531
FAX（075）231－0272

—建仁寺案内図・周辺地図—



ご来場ありがとうございました。

京都大学書道部



This book was
made by the LeME